

リスボン大地震一七五五年の諸相とモレイラ・デ・

メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』

―リスボン大地震 近代ヨーロッパの社会的震撼 その一 ―

永治日出雄

まえがき

歴史におけるリスボン大地震 リスボン大地震と現代

二

第一節

王都リスボン、大地震の直撃、大津波の襲来、ポルトガル人の信仰、民衆の罹災と避難、サン・ジョルジエ城とオラトリオ会修道院の衝撃、リスボン港埠頭の惨劇、モレイラ・デ・メンドンサと『世界地震通史』

第二節

神の怒りと審判、民衆の畏怖と祈祷、火災の発生、犯罪の頻発、王室の避難、緊急措置の発令、『ヨハネ黙示録』、王宮広場の凄惨、貴族による救護、造幣局の防禦、聖職者の献身

一八  
- 1 -

第三節

大火の規模と範囲、教会と殿閣と王宮の炎上、王都中心部の絵図、蔵書と図書館の焼失、エルセイラ伯爵の蔵書、教会と殿閣の壊滅、サン・ヴィセンテ・フォラ大寺院の倒壊、財産の喪失と経済的損失

三三

第四節

震災による死亡数、死者の内訳、破壊された建物、消失した財産、罹災への緊急政策、食糧確保の措置、リスボン復興の改革と実現、災害への危機管理、王権と教権による祈祷行列

四八

併せて試訳『世界地震通史―リスボン大地震』

(第二部) 第四七二項から第五五七項まで

## 歴史におけるリスボン大地震 リスボン大地震と現代

一七五五年十一月一日ポルトガル王国の首都リスボンを巨大地震が直撃した。この地震はイベリア半島のほぼ全域を揺がし、北アフリカやフランスでも強い震動が、また遠くスウェーデンやアイルランドでも津波が観測される。リスボンにおける未曾有の災害はいち早くヨーロッパ各国に伝えられ、知識人や文筆家の関心を惹いて、ヴォルテール対ルソーの有名な地震論争を誘発した。

アメリカの著名な地震学者チャールズ・リヒターは主著『基礎地震学』のなかでリスボン大地震をつぎのように位置づけている。「一七五五年十一月一日のリスボン地震は、我々が科学的な記述をなしうる最初の地震事象のひとつである。これほどの大震災は西ヨーロッパにおいて稀有であって、世人の関心と科学的関心が熾烈に喚起され、多大の報告も遺されている。」リスボン大地震はヨーロッパの思想や文学へ深い影響を及ぼした。「文明という人間の所産を攻撃する小冊子でルソーは、田野で暮らすならば、地震によって殺されることはなかるうと述べた。ヴォルテールはリスボン地震をきわめて深刻に受け止め、軽妙な諷刺小説『カンディード』で挿話のひとつに組み入れたが、ルソーの見解にはいささか冷淡な対応を示している。」

この大震災についてはモレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』など同時代の証言と記録が多々遺され、五年後イギリス王立協会で発表されたジョン・ミッシェルの論究は、震動の自然的要因を解明し、地震学誕生に至るひとつの契機とされる。王権による直後の罹災調査が一九一九年ペレイラ・デ・ソーサの浩瀚な著作、『一七五五年十一月一日ポルトガル地震―人口学的研究』として集成されたが、チャールズ・ダヴィソンの著書『大地震』に代表されるように、二十世紀前半はおおむね地震学など自然科学的な検証に重点が置かれていた。しかし、大地震から二百年を経た一九五五年、イギリスの研究者T・D・ケンドリックによって先駆的な著作『リスボン地震』が刊行され、論究の範囲が地震の規模や被害の状況だけでなく、政治、経済、宗教、思想、文学、美術、建築への影響にまで拡大される。さらに震災後の復興事業を主題として綿密な研究『啓蒙の都市―ポンバルのリスボン』が、一九六五年フランスの歴史学者ジョ

ゼIIアウグスト・フランサによって達成された。

しばらく時を隔てて二〇〇五年、大地震二五〇周年の記念事業としてオックスフォードのヴォルテール研究所で論集『一七五五年リスボン地震―表出と反応』が企画され、これには編者テオドル・ブラウンのもとにポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、スイス、チリなど六カ国の研究者が寄稿した。また、以後数年の間に欧米諸国でそれぞれ特色ある著作や論文が公開されている。ロンドンでは在留イギリス人の証言を主体としたエデュワード・パイス著『神の怒り―一七五五年リスボン大地震』、パリでは文学作品や自然科学への影響をも分析したジャン・ポール・ポワリエ著『リスボン地震』、マドリッドでは膨大な調査記録を集録したJ・M・マルチーヌIIシユアレス著『リスボン地震のスペインへの影響』、アメリカ合衆国では物語的叙述を加味したニコラス・シユラデイ著『最後の日―リスボン大地震における怒り、壊滅、理性』などがそれである。これらの研究においては現代社会への意義や警鐘も重視され、リスボン大地震の社会的・思想的震撼は広島・長崎への原爆投下が世界へ与えた衝撃にも匹敵するとも語られた。

ポルトガルではこの間多彩な行事や出版が実現され、絵図や図版を豊富に収めたジヨアン・ドウアルテ・フォンセカ著『一七五五年リスボン地震』、さらにはエレーナ・アルヴァルハオ・ブエスキュほか編『リスボン大地震―さまざまな対応』がとくに注目される。また、二〇〇九年にはリスボンの研究機関を中心に各国から地質学、統計学、建築学、土木工学、構造力学等の専門家八二名が結集し、論集『一七五五年リスボン地震再訪』が刊行され、今後人類がこの大地震から震災の防止と軽減、さらには災害への危機管理について深く学ぶべきことが強調された。

これらの著作はすべて東日本大震災の以前に公開されたものであり、日本ではとくに関心を寄せられることはなかった。しかし、二〇一一年三月十一日極東における大惨事は、原子力発電所の壊滅という新たな要素をも含み、その社会的震撼はいまも続いている。

---

Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*.  
London, 2008, p. xvi.

Luis A. Mendes-Victor, Carlos Sousa Oliveira, João Azevedo, António

Ribeiro (eds), *The 1755 Lisbon Earthquake : Revisited*, London, 2009.

pp. 3-4.

## 第一節

王都リスボン、大地震の直撃、大津波の襲来、ポルトガル人の信仰、民衆の罹災と避難、サン・ジョルジェ城での衝撃、オラトリオ会修道院の被災、リスボン港埠頭の惨劇、モレイラ・デ・メンドンサと『世界地震通史』併せて『世界地震通史―リスボン大地震』第四七二項から第四八四項まで

リスボン大地震に関する主要な文献として筆頭に挙げられる『世界地震通史―リスボン大地震』*Historia Universal dos Terremotos, que tem havido no Mundo* は地震発生の三年後、一七五八年に公刊された。著者ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサは、ポルトガル古文書館の要職にあり、みずから大地震・大火・大津波を体験した。全巻三百頁、六百項に及ぶ『世界地震通史』では、著者自身による序言と出版許可の文書のあと、三つの部門にわたる本論が展開される。その第一は世界における地震の歴史、第二はリスボン大地震の詳細、第三は地震に関する古今の学説であるが、中核をなすのはもとより第二の部門、

原典の表紙に誌された本来の書きとその訳訳を左記に掲げる。

JOACHIM JOSEPH MOREIRA DE MENDONÇA, HISTORIA UNIVERSAL DOS TERREMOTOS, QUE TEM HAVIDO NO MUNDO, de que ha noticia, desde a sua creação até o seculo presente. Com humma NARRAÇAM INDIVIDUAL Do Terremoto do primeiro de Novembro de 1755. e noticia verdadeira dos seus efeitos em Lisboa, todo Portugal, Algarve, e mais partes da Europa, Africa, e America, aonde se estendeu : E humma DISSERTAÇÃO AO PHYSICA sobre as causas geraes dos Terremotos, seus efeitos, differenças, e Porognosticos ; e as particulares do ultimo.

ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・ド・メンドンサ著『万物の創造から今次の世紀に至る世界地震通史―とくにリスボン、ポルトガル全土、アルガルヴェ、およびヨーロッパ、アフリカ、アメリカの多数の地域を震撼した一七五五年十一月一日の地震に関する個別の記録、ならびにその地震の原因、結果、差異、予測に関する自然学的論究―』

このように長大な書名であるため、本稿では便宜上『世界地震通史―リスボン大地震』または『世界地震通史』の略称を用いる。

いわば第二部にあたる論述である。一七五五年に起きたヨーロッパ最大の震災についてモレイラ・デ・メンドンサはつぎのように語り始める。

『世界地震通史ーリスボン大地震』

地震の歴史 一七五五年十一月一日

【第四七二項】 この年十一月に人類が体験した地震は、規模の大きさによって後世のあらゆる世紀に想起されるであろう。なぜなら、その影響は遺憾にもきわめて多くの地域に及び、アジアのみが免れたからである。甚大な被害を蒙った地域の第一はポルトガル王国、とくに国王陛下の王宮を擁し、殷富で人口稠密な都市リスボンである。最初にこの都会における大地震の結果を報告し、さらには王国の各地や連関する諸地域についてその影響を叙述したい。

ポルトガルの首都リスボンは北緯三八度四六分西経九度九分、ヨーロッパ大陸の西南端に位置し、宮城県石巻や女川とほぼ同じ緯度にある。マドリッドの東方ウニヴェルサレス山地に発する大河テージョは、イベリア半島を横断し、西南部で三角江をなして大西洋に注ぐ。リスボンは北岸の緩やかな斜面に築かれ、河口からの距離は約十キロ、縦六・五キロ横二・五キロの流域を占めた。十八世紀のポルトガルは本土の面積において現在と大差はなく、短冊形の国土は東北地方に北関東を加えた広さに近い。その西側の山岳部はスペインとの国境を画し、大西洋を望む東側の海岸線は、鹿島灘から三陸海岸に至る長い沿岸部を連想させる。

「その古事と雄大さによって、」と大地震の五年前イギリスで刊行された『スペインーポルトガル周遊』において著者ウダール・ライスは誌している。「さらには建築の美しさ、都邑の広壮さ、財富の豊かさ、港湾の素晴らしさによってリスボンは傑出している。また、ここは総大司教の管轄区ならびに王国の首都でもある。」「ギリシャ神話の英雄ユリウス（ユリシーズ）に由来するこの港湾都市も、ヨーロッパ諸国の人々にとってはフィレンチェやパリほど心惹かれる景勝ではなかった。そうした通念をこの旅行案内書は一新したと言われる。リスボンとテージュ河の景観についても彼はつぎのように描写する。「この都市は七つの丘のうえに造営された。いくつかの丘陵がとくに屹立し、ほかの丘も各所であるいは繋

Moreira de Mendonça, *Historia Universal dos Terremotos, Lisbon, 1758.*

p.113.



がり、あるいは対峙して、多彩な丘陵と溪谷が美事に形成されている。したがって、テージュ河の向岸から眺めると、壮大な円形劇場のように映じ、絶妙な地形による類稀れな景観、壮大な建築に籠められ千状万態の魅力をすべて感じさせる。市内の高みから俯瞰しても、魅力的な国土の眺望が得られる。美しい国土に加えて、テージュ河に万国の船舶が雲集する情景ほど、素晴らしい絵図があるだろうか。」

メキシコ海流の偏西風を受けて、四季を通じて温暖であり、冬には避寒や療養のため滞在する外国人も見られる。ライスはポルトガルの風土と気候をも推奨する。「ここでは大気がとりわけ温和、天空もとりわけ晴朗であって、つねに快適に過ごせる。良質の飲み水とも相まって住民をきわめて壮健にするため、他の風土とは異なつて、疾患に苦しむことも、新しい病気に罹かることもなく、彼らは幸福にも非常な高齢にまで存命する。かくも温暖であるから、冬にさえここでは薔薇や他の草花が眺められる。」

そうした爽快な秋の午前、未曾有の大地震がリスボンを直撃した。筆者は史料的な価値に鑑みて、『世界地震通史ーリスボン大地震』の第二部全文を読解し、その試訳を別立てとして順次掲げる。

『世界地震通史ーリスボン大地震』

【第四七三項】 十一月一日、月曆二八日、大気は静穏で、雲はなく快晴。十月から温暖な数日が続ぎ、秋としては多少暑さを感じた。気圧計二七インチ七ライン、レオミュール温度計一四グラオ、北東の微風。午前九時半をすぎ過ぎた頃、大地が揺れ始めた。その震動は地底から地面へ突き上げ、衝撃を増しながら、北から南へ揺さぶるように続いた。これに伴って建物の被

Udal ap Rhys, *A Tour through Spain and Portugal*, London, 1750. pp. 265, 271-272.

Rhys, *op.cit.*, p. 272.

リスボン大地震を綿密かつ多面的に考察し、この分野で先駆的な役割を果たしたケンドリックは、一九五五年刊行の著書『リスボン大地震』において『世界地震通史ーリスボン大地震』をつぎのように評価する。これこそ

「もつとも優れた同時代の証言、際立って価値ある書物であり、さまざまな大地震について従来なされたあらゆる研究を凌駕するものと私は考える。」

Kendrick, *The Lisbon Earthquake*, New York, 1955. p.247.

害が生じ、数分のうちに倒壊と壊滅が始まり、大地の激烈な震動とその持続に人々は抵抗できなかつた。第二の震動は一層規則的に七分か八分続き、短い中断を挟んで二度の地震が起つた。あたかも遠くで雷が鳴るときのように、地下の雷鳴ともいうべき轟きが、この時間に終始聞えた。猛烈な速度で走る馬車のように多くの人々は思った。まさしく大地から噴出する蒸気によって、太陽の光が多少とも暗くなり、そこに含まれる硫黄の成分から臭気が発散するように感じられた。大地のあちこちに幅広くはないが、延々たる亀裂が認められた。建物の壊滅によって発生した粉塵が王都の一带を濃い霧で覆い、あらゆる生きものを窒息させた。

【第四七四項】 こうした大地の揺れによって海水が背進し、岸边では初めて見る海底も露出した。また、そそり立つ丘陵をも洗い、尽きることのない震動が、沿岸のあらゆる民族へ影響を及ぼした。氾濫は大きなもの三度、小さなもの数度にわたり、多数の建物と水辺の多くの住民を破滅させた。

一九三六年に刊行されたチャールズ・ダヴィソンの著作『大地震』は一八世紀以降の震災十六を解明した労作であるが、その第一章をリスボン大地震の分析に当てている。ダヴィソンの考証によれば、当日の地震は三次にわたり、最初の衝撃は午前九時四十分頃であった。「第一次の震動は早くはあるが、微細な揺れで始まり、警戒もさせないまま約一分続いた。そのあと二十秒ほどの間隔を置いて、急速で激烈な震動が発生し、家々が崩れ始めた。二分有余続いたであろう。さらに一分たらず止つたのち、異なつた性質の震動、乗物を岩場に突き上げるような震動が襲いかかった。この局面が二分から三分続いて、リスボンの住宅、教会、公共建造物が壊滅し、数千人の生命が奪われた。」引き続き震動については明確な証言が乏しく、ダヴィソンは第二は九時五五分から十時四十分までの間、第三は正午頃と推測している。

「震動記録が欠如するために、」と『基礎地震学』においてリヒターは論述する。「マグニチュードをおおまかにしか適用できないが、すでに私たちがマグニチュードを明確した土地とリスボン地震の発生地とを対比すれば、結論が得られ

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 113-114.

なお、気圧計二七インチ七ライン、レオニール温度計一四グラオは気圧計約二三八ヘクトパスカル、温度計摂氏一七・五度に相当する。

Charles Davison, *Great Earthquakes*, London, 1936, pp. 9-10.

る。任意の地点、たとえばリスボンの西約千キロを震央として選び、災害の外周を平均六百キロの距離、人体に感じられる外周を平均二千キロの距離、また水面の震動（セイシュ）を生じる外周を平均三千五百キロの距離と確認できる。これと一八九七年インド地震を対比して、いずれの衝撃もほぼ等しく強烈であるとオールドハムは結論した。リスボン地震のマグニチュードはおそらく八・五以下ではなく、八・七五に近いと思われる。リヒターによつて確立された震度の測定、いわゆるリヒター・スケールを適用すれば、リヒターによれば、一九〇六年のカルフォルニア大地震と一九二三年の関東大地震はともにマグニチュード八・三であり、一八九七年のインド（アッサム）地震がリスボン大地震とほぼ同じ強度とされる。二〇一一年東日本大震災のマグニチュード九と二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波がほぼ同じ規模である。ちなみに計測された史上最大の揺れはマグニチュード九・五の一九六〇年チリ地震である。

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四七五項】 このような光景が悲痛な記憶を私に甦えらせる。多くの悲惨な事実が念頭に浮かび、それらの膨大さ、多様さ、深刻さは仔細に語るのを私に躊躇させる。だが、災厄の一端を話すだけでも、巨大な全貌を知る手掛りになるかもしれない。

【第四七六項】 おりしも万聖節の祭日として盛儀が予定され、その時刻にはあまたの人々が教会へ参集し、聖職者の説教に恭しく聴き入るか、当日の式典を待ち受けていた。同じ目的で寺院をめざしたり、用務を果たすため、道を急ぐ人々もかなり見られた。王都の住民の大半は自宅にいて、人によってはまだ床を離れない。地震を感じるや、すべてが脅威、混乱、無秩序となつた。

罹災者の恐怖と艱苦を倍加させたのは、キリスト教の重要な盛儀に地震が発生したことである。ポルトガルはイタリア、フランス、スペインとともに有力な力

Richter, *op.cit.* p. 105.

なお、日本の報道機関等で広く用いられる気象庁マグニチュードは、リヒター・スケールを基礎としながらも算定がやや異なる。

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 114-115.



トツリク教国であり、とりわけ信心深い民族として知られていた。一八世紀中葉リスボンには四十の教区教会をはじめ、若干の非教区教会、一二一の礼拝堂、九十の修道院、さらには一五〇の宗教団体があった。イギリスの神父ジョージ・ホワイトフィールドは一七五四年ポルトガルに滞在し、当地の宗教と習俗について貴重な証言を綴っている。「もっとも目立つのは、十字架像をはじめ聖母マリアや名高い聖者の像が溢れることで、それらはどの道路に傍らや街角の家塀でも燈明に照らされ、置かれています。通り過ぎる男女はそれらに礼拝し、一団の人々が熱烈に唱和するのも見かけました。」宗教的な関心から彼はこうした習俗に注目し、以後も緻密な観察を続ける。投宿してまもなく「窓から外を眺めていると、点火した蝋燭を持ち、多彩な信者を従えた聖職者や修道士の群れが現れました。一方では穀物を袋や籠に容れて携え、他方ではふたりずつ天秤で食糧を背負っています。そのあとにも大勢の善男善女が続いて、朗々と合唱し、神よ、恵み給え！」と聖母マリアにかならず祈ります。こうした様相で彼らは牢獄へと行進し、運搬したすべてを哀れな囚人に供するのです。」クエーカー教徒の牧師によって綴られ、同じ宗派の友人に宛てたこの手紙には長い標題、『リスボンで昨年目撃した大齋節、異様な祈禱行列、教会の行事に関する簡潔な報告、イギリスの友人に宛てた四つの書簡』が付けられている。

万聖節は降誕節、復活節、大齋節などと同じくカトリックの重要な祝日であり、この日は数多くの聖者に盛儀が捧げられる。前夜から街々で祭りが始まり、リスボンではとくに王都の守護聖人、聖者アントニオが崇敬を集めた。一七三〇年パリで出版された著者不詳の『都市リスボン細叙』にはつぎのような記述が見出される。「男も女も聖者ブノワを深く信仰し、その聖遺物が大きな教会、ポルトガル語で彼の名を付したサン・ベント教会に安置される。三月二一日はこの聖者の祝日であつて、教会の門前に蟬集する民衆が、パンに事欠かないようにと祈願する。そして、どの金曜日にも娘たちはよき配偶者と結ばれるようミサで祈る。」また、老人や病人は聖者ゴンカロをとくに信仰し、ロッシオ広場のドミニカ会修道院に祀っている。祭日に彼らはそこで祈禱とともに踊りと聖歌を捧げる。聖者のとりなしで治癒するために、彼を讃えて踊ることが必要なのである。「ダヴィッド王が拱門の前で踊り、楽器を奏したと旧約聖書に書かれていることが、こつ

---

*George Whitefield, A brief account of some Lent and other extraordinary*

*processions and ecclesiastical entertainments seen last year at Lisbon.*

*in four letters to an english friend, London, 1755. pp. 2-3.*

した祭事の根拠である。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四七七項】 ある人たちは屋内で茫然として地を踏むことも、戸を叩くこともできず、他の人たちは街路に跳び出して、障壁の瓦解によって死んだ。街路から教会へ避難する者もあり、降りかかる危険を避けるため教会から逃れる者もいた。住居の倒壊によって多数が石材の下敷となって絶命し、瓦礫に生き埋めにされ、救助を求めて泣き叫ぶ者もあつた。

【第四七八項】 破壊された多くの寺院、階段、穹窿、障壁が群衆の頭上に落下し、逃げ惑う彼らは神の慈悲を求めた。そうした叫びは聖母マリアの加護を願つてもなされる。同じ叫喚は王都のあらゆる街路や地点、近郊のさまざまな地区で聞かれた。地震の脅威、建物倒壊の轟音、死への恐怖、男衆の喚き、女子供の泣き声が異常な喧噪と錯乱を惹き起し、全般的な錯乱によって危機に対応できぬ状況となつた。

オラトリオ会の神父マノエル・ポルタルは王宮の北西、ノヴァ・アルマダ街にの修道院で地震に襲われた。修道会の悲劇に関する証言を、ポルタルは万聖節の前夜から始める。「万聖節の前日説教を済ませた私は、夜になって二度小さな地震があつたと数人から聞きました。」その修道院は王宮広場の北、由緒あるノバ・デ・アルメダ街に位置する。質素な僧房に戻つた彼は、大切にしているイエス像にも祈りを捧げた。「すこし以前からマヌエル・ディアスの美事な製作、主イエスの十字架像を私は持つていました。手に入れたのが大層嬉しく、あの世への旅でも伴侶にしたい気持だったので。」その像にはイエスの最期が崇敬の念をもつて表現されていた。「眠りに落ちると、十字架像が夢に現れ、もはやあなたには主イエスの姿が見えないと言われます。夢枕で私は深く心を痛め、わが罪の赦免を主に願いました。なんとしてもという思いです。主のお答えは変りない。哀願を続けながら、苦悶する私は、恩寵を賜るのは絶望的と感じました。目覚めて陰鬱な気持です。床を離れたあと、かなりの困惑と深い苦悩に沈みながら、ミサに参じました。」万聖節のミサが終わると、小人数の会合が予定されていた。「礼拝規定書に定められた小部屋でしばし寛いだことを想起します。ジョアン・バリ

*Description de la ville de Lisbonne*, pp. 120-122.

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 115.

ボサ神父が来られてまもなく、新しい回廊に沿う小部屋の床板が揺れ始めます。床板が軋るのを気にした私は、すぐに地震だと感じ、神父について庭園の方へ急遽駆けました。「門を越えようとした神父は、横転する木箱と作業台の間に倒される。「自分の頭上で回廊の屋根が崩れ、礼拝堂の上に倒壊したのです。ディオゴ・ヴェルネイ神父は向側の回廊で身を支えていました。身体は埋れましたが、石などは落下せず、頭の痛みもありません。地震は七分間続き、死の接近を刻々と感じながら、鎮まるまで神に慈悲を求め続けます。震動が止んでも、身動きができません、慄然として大声で救助を求めました。神の御心によって窓口から脱出できた方々、フランシスコ・ダ・カルバコ副修道院長、ホウチスモ修道士、アントニオ・ゴンサルヴェエ修道士、さらにはジョアン・バリボサ神父と商人マヌエル・ゴンサルヴェエが、みな大いなる博愛を發揮され、私を救出されたのです。脚の上を岩石が塞いで、持ち上げるのに人手を要し、私の衣服も破れました。幸運にも救い出されたものの、脚は腫れ、目は血に染って、深い傷のまま庭園の方へ這い上ったのです。」

イギリスのクエーカー派牧師リチャード・ゴダールは療養のためリスボンに滞在し、この朝高台のサン・ジョルジエ城へ散歩に出掛けた。王都の象徴とも言うべきこの城砦は、古代ローマによって築かれ、ながくイスラム勢力に占領されたのち、ポルトガル建国の王アフォンソ一世によって奪還された。一二五五年リスボンへの遷都に伴ってここに王宮が定められ、のちにインドから帰還したヴァスコダ・ダ・ガマも迎え入れる。この城郭もリビエラ王宮の造営後は等閑なまじりにされ、老朽化も目立ったが、展望の良さもあって当地有数の名所とされていた。牧師ゴダールはイングランド西部の名門貴族の次男である。十時半からイギリス大使館の礼拝堂でミサが行われるが、まだ多少時間の余裕があった。バイシャ地区から大西洋にまでと拡がる壮大な眺望を楽しもうと、城砦の展望台へ展望へ近づいたとき、突然全身に衝撃を受ける。「私の思いは疾走する馬車の轟音に中断されま

Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, in F. L. Pereira

de Sousa, *O Terremoto do 1.º Novembro de 1755 e um Estudo Demografico*.  
Lisbon, 1932. Volume III, pp. 614-615.

のちにポルトガル神父は震災後一年間の出来事を綿密に記録し、一七五六年末に上梓された。この冊子は久しく稀覯本とされたが、大半の叙述がソーサ著『一七五五年十一月一日ポルトガル地震―人口学的研究』に採録されている。ただし、ソーサの著作自体も現在は入手がかなり困難である。

した、」と彼は故郷の友人への書簡に誌している。「そこらでいまだ聞かなかつたよな轟音ですが、多少の震動を伴うので、きっと馬車数台だと判断したのです。しかし、すぐさま思い違いに気づき、極度の戦慄に包まれます。大地の震動が非常に勢いを増したため、倒れかかる自分を辛うじて保ち、数歩先の旗竿に寄りかかつて身を支えました。これに加えて群衆の驚倒が私を動揺させ、脇を駆け抜ける男の悲鳴も、ポルトガル語の叫びであるものの、怯えた表情からはっきり理解でき、まさしく不測の事態を認識させました。そして、いま眺めたばかりの城郭の上部、荒れ果てた建造物が崩れ始め、周囲の家々もそれと運命を共にし、言語に絶する光景が現出したのです。次第に震動は弱まったので、最悪のときは過ぎたと思ひ始め、座り込んだ人々も身を起しました。しかし、彼らが立ち上がるや否や、勢いを増して震動が再発し、必然的な破滅に万物を突き落とすかのようでした。このとき私が目撃した怖るべき混沌たる光景は、いかなる言葉によつてもお伝えできません。もしも後世に伝えるとすれば、それほどの出来事を目撃したと言えないのです。それまで輝いていた太陽は建物の倒壊から発する砂塵に隠されました。ほとんど暗闇に覆われた私の居所は、荒墟と化した首都の真中にあり、神の慈悲を哀願する人々の叫びに満されています。そして、大地の激動によつていまにも呑み込まれるかと怯えます。いまだ記述されず、想像すらできない極限に私は陥つたのです。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四七九項】 一つした怖るべき騒擾のなかで愛だけが滅びなかつた。父母は子から引き離され、子は生みの親を見失う。恋人たちはたがいに探し求めた。なにびとも財貨を支えにできず、懸命に生き残ろうと、魂の救済だけを願つた。

【第四八〇項】 多くの死者を調べたが、禍因はさまざまであつた。ある人たちは壊れる危険のない家屋から去つたり、他家の障壁の下に生き埋めとなつた。ほかの人たちは目を天に向け、跪拝したまま建物の石材のため絶命した。こなたでは救助された母親が死せる子を抱き、こなたでは息絶えた母親に抱かれる子が救助された。落下する石から子どもを両腕で護つた人もある。カルメル会修道士と思われる人物が、進退極まる高窓に残され、遠方に



いる聖職者に赦免を願って、火焰で焼かれるまで律儀に待機した。これこそ神が下された畏怖すべき審判の顛末である。

【第四八一項】障壁の大きな残骸の下で煉瓦を集め、坑道を造って脱出した修道女もいる。身に帯びた衣服が瓦礫に絡まり、身ひとつで抜け出したひともある。奇蹟的なまでに機敏な対応である。寝たきりの患者や瓦礫による重傷者でも、いかに多くの人たちが医者も医薬もなしに幾日で気力を取り戻したことが。これらこそ神慮による奇蹟にほかならぬ。

港湾都市リスボンはふたつの地帯、三つの地区に大別される。第一は港湾から太い帯状に北東へ貫通する低地帯、いわゆるバイシャ地区であり、第二はその両脇に広がる高地帯、すなわち西側のアルト・バイロと東側のアルファマ地区である。ダヴィソンによれば、とくに深刻な被害を受けたは、河岸に近いバイシャ地区であり、地質的には第三期地層に建設されていた。丘陵と渓谷から成る高地帯は第二期石灰岩を基盤とし、地震の被害もやや軽度とされる。いずれも道路の多くは狭い坂道であり、住宅も大抵は四階建てか五階建てに造られていた。

『都市リスボン細叙』には王都の人口とバイシャ地区の様子がいかのたとおり誌されている。「河岸近くの道路は平坦な石畳であつて、広さも申分ない。だが、泥濘を除くため、三日毎か四日毎にしか清掃しないので、かなり不潔である。」<sup>13</sup> そうした河岸から王宮広場にかけては商業の中心地であり、民衆の生活の場でもあった。「主たる精肉店は王宮広場にあつて、その広さや清潔さとともに治安の良さでも際立つ。」内部の仕切りはすべて陶製のタイルで造られ、大量の食肉が六フィート以上の高さに積まれている。「中央の計量器の脇に警視の席がある。つねに彼はそこにいて、秩序を護り、誤魔化しを即座に糺す。」精肉店街からやや先に進むと、魚屋が連なる大きな広場に出る。「世界でもっとも豊富な魚市場である。そこでは夥しい量の魚が求め易い価格で供されるので、当地の住民は普通の日でも、とりわけ夕食に喜んで肉を断つ。」テージュ河からは活きの良いワシを無数に捕獲でき、塩漬で山地に送る人も多い。「これら大量の鮮魚を二百艘から三百艘のカラベル船で日々漁場から魚河岸へ輸送するのである。」

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, p. 116.

Davison, *op. cit.*, p. 1.

*Description de la ville de Lisbonne, op.cit.*, pp. 8,- 39-42.



『世界地震通史ーリスボン大地震』

【第四八二項】 家屋を喪失した人たちが多数テージュの河畔へのがれ、震えながら荒墟を仰いでいた。突如そこへ怒濤のように海嘯が押し寄せ、リスボンのみならず、八キロ離れたリオ河口の都市まで被害を及ぼした。海流は従来の限界を超えて多数の建物を水没させ、サン・パウロ地区に氾濫したのである。どの水辺でも海嘯は激しさを増し、新たな危険が王都と近郊に拡がって、全土が海に呑まれるとの噂が飛び交った。

『都市リスボン細叙』ではユリウスの都の景観とともに、小さな地震の発生や沿岸部の危険も指摘されていた。「船上から見詰めると、壮麗な円形劇場を思わせるようにやがてリスボンが浮き出て、その高さや広さによって、またあたかも天然の一大墓地の如く、稀有な絶景を現出させる。王都の正面にテージュ河が三里もの幅広い港を築き、つねに無数の船舶を呼び寄せている。しかし、ときには激しい嵐の際に南東の風に曝され、たとえば一七二四年十一月あらゆる種類の船一八〇艘が乗り上げたり、沈没した。」

『世界地震通史ーリスボン大地震』に記録された津波の猛威について、イギリス人貿易商ブラドックもつぎのように証言する。「突然群衆の悲鳴が聞えます。海が来る！みな浚われる。四マイルほど離れた河の方を見遣ると、風もないのに波濤がきわめて異様に隆起し、拡大しています。すぐさま山のように巨大な高潮が間近に迫りました。激しい海鳴りとしぶきで押し寄せ、激しく陸岸を轟進するので、必死になってみな逃げます。その場で多数が命を失い、水辺から遠く隔たるところでも人々は腰まで水に浸りました。私自身も九死に一生を得たのです。同じく急激に高潮が退くまで、地面に転がる大きな角材を握り続けなければ、命を失ったでしょう。」

未曾有の地震は津波を併発し、壮麗な王都へ怒濤が押し寄せる。最初の震動とほとんど同時に広範な海嘯が観察された、と『大地震』の著者ダヴィソンは考証する。「海流は最初引き潮をなし、砂洲が平素より広く露呈した。そのあと猛然

---

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 116-117.

*Description de la ville de Lisbonne, op. cit.*, pp. 5-8, 34.

Braddock, letter to Reverend Dr. Sandby dated 13 November 1755, in Charles Davy, *Letters addressed chiefly to a young gentleman upon subjects of literature*, volume II. pp.26-27.

たる怒濤となつて、半マイル以上内陸部へ驀進し、王都低地帯の街路や庭園に浸入したのである。橋は破壊され、壁も転覆し、巨大な堆積が流されたり、押し上げられた。カスカエス、ストーヴァル、アルガルヴでは多数の人々が浚われ、溺死する。」大きな船舶も錨綱を切られ、横倒しとなる。「こうした上げ潮と引き潮が一六フィートほどの高さで三度繰り返し、午後二時頃正常に戻った。」さらにメンドンサの記録にも誌される河岸の惨事についてダヴィソンはつぎのように述べる。「この地震の被害としてもつとも面妖なひとつは、新造の巨大な埠頭の沈没である。その埠頭は税関事務所の近くのデプレラ洲にあり、粗野な大理石で造られ、きわめて頑丈なのである。ある船長の確かな証言によれば、そこから二百ヤードか三百ヤード離れて停泊していると、第二の震動とともに水面が突然二〇フィートほど隆起し、すぐに鎮まった。その瞬間埠頭が沈下し、最初の地震でそこへ避難した人々が、すべて、近くの小舟や客船もろとも全員沈んだ。いかなる遺体も遺品も浮かばないのである。数日後ブラドックはその場を点検したが、埠頭の跡がなんら見出せなかつた。のちのち一八四一年にライエルの報告がなされ、三〇フィート以上の深さなどテージュ河のどこにもないと言つ。長年の間に地盤が変化したこともありうるが、埠頭の沈没について彼の説明がもつとも妥当と思われる。すなわち、テージュの河底で狭い亀裂が開き、建造物と船舶を呑み込んで、再度閉じたのであろう、と。」

古代ローマの哲学者セネカは南イタリアの被災に心を痛めながら、地震に襲われた民衆の艱苦を『自然研究』のなかで語っている。「この世が揺れ動き、もつとも堅固な地盤が震動するならば、またあらゆる建造物を支える確固たる基盤が波動し、不動という大地の本質が消え失せるならば、いづこへ安全に避難できるだろうか。どんな極限に我らの恐怖が達するだろうか。住居の深奥が脅威の源であり、足元に危険が横たわるとすれば、動揺する人々はどのようにに逃れ、どこへ身を置くのか。屋根が揺らぎ、建物が倒壊して、すべてが錯乱状態となる。だれもが狼狽して駆け出し、自宅を打ち棄てて、野外に避難する。だが、地球自体の壊滅も憂慮されるとき、まや我らを護り支える地面、我らの街々の基盤である大地、宇宙の基底をなすこの天体に亀裂と動揺が生じるとき、どこへ脱出し、安全

Davidson, *op. cit.*, pp. 12, 20.

ダヴィソン著『大地震』では美濃・尾張地震、三陸地震、丹後地震、伊豆地震が各々一章を占め、津波の規模についても記述されているが、部分的にはやや不正確と評される。

な地を求めるのか。恐怖が憑きまとうとき、どんな支援や慰藉が役に立とう。「嵐や疫病は防禦が可能であり、他からの侵略も城壁によって阻止できる。「しかし、地震という災厄は必然的に広汎な被害を惹き起し、万人を悲惨に陥れて、止まるところを知らない。住居や家族や都市を襲うだけでなく、諸国民や諸地域の全体を破壊するのである。あるいは瓦礫で埋め尽し、あるいは深淵に沈めて、かつて存在したものの痕跡すら遺さない。名高い都の跡にも大地が拡がるのみでありし日を偲ぶいかなる遺蹟もないのである。」 古来の地震理論を扱った『世界地震通史―リスボン大地震』のいわば第三部でセネカの『自然研究』は再三論究されており、モレイラ・デ・メンドンサはこの書物を熟読したと思われる。民衆の艱苦に対する洞察において両者は相通じるが、リスボン大地震についての記録は一層具体的で痛切である。『世界地震通史』のなかで著者自身の被災に関する文言は僅少であるが、彼が終始民衆と艱苦を共にしたことは、そこにおける傑出した描写から推察できる。

ポルトガルの文学史家エレーヌ・カルヴァルハオ・ブエスキュは、「『世界地震通史』をリスボン地震を描出したもつとも詳細な記録のひとつ」と評価し、優れた歴史的証言の要件、すなわち「視覚的要素の伝達」と「細部、事例、秘話」の挿入がこれらの史料に備わると分析した。「あまりにも多くを見たときには、語りは途絶え、言葉も見出せない。」このように述べてブエスキュは、『世界地震通史』の第四七九項等を引用しながら、つぎのように評価する。「現代のような視聴覚機器を当然使えない時代には、眼前に彷彿とさせる という古来の修辭法が、大惨事を報告する秘法であった。二〇〇四年の十二月三十一日津波によるアジアの大惨事が、映像、写真、ビデオ、映画、絵図等での特集に組まれ、速報

---

Lucius Annaeus Seneca, *Naturalium Quaestionum*, avec la traduction  
par M. Ajasson de Grandsagne . in *Sénèque, Œuvres complètes*, Paris,  
1833, Tome VIII, pp.362-365.

参照 セネカ「自然研究」『セネカ哲学全集』岩波書店、二〇〇六年。  
第四巻、七一八頁。

Moreira de Mendonça, *op. cit.*, pp. 169, 172-174.

として過度に提供されたことを思い出してほしい。」

## 第一節

神の怒りと審判、民衆の畏怖と祈祷、火災の発生、犯罪の頻発、国王一家の避難、緊急措置の発令、『ヨハネ黙示録』の警告、王宮広場の凄惨、貴族による救護、造幣局の防禦、聖職者の献身

併せて『世界地震通史―リスボン大地震』第四八五項から第五〇七項まで

リスボン大地震においてとくに顕著な精神状況は宗教的な苦悶と哀願である。古来キリスト教ではさまざまな災厄が神の御業であり、人類への警鐘と説かれていた。こうした災厄には地震、洪水、旱魃などの天変地異だけでなく、疫病、大火、戦争も含まれる。『マタイ伝』第二七節によれば、イエスが処刑された瞬間、天の怒りによって大地が揺れ、巖が裂けた。こうした神の審判をもっとも熾烈に予言するのは、『ヨハネの黙示録』である。靈感を受けたヨハネの幻想では、栄華を極め、奢侈と淫靡いんびに染まる大都を転覆するため、神は三次にわたり各々七度神は災厄を喚び起す。封印を標識とする第一次では戦争、飢饉、疫病に続いて、さらに「大いなる怒りの日」がくる。聖なる小羊が第六の封印を切るや、激しい地震が発生し、太陽は服喪の袋地のように暗くなった。「月全面が赤く変色し、きら星も地に墜ちる。」地上のあらゆる君主、支配者も指揮官も、富者も権勢家も、奴隷や平民を含むすべての住民が、山岳の洞窟や岩間に身を隠した。「また、喇叭の音が響く第二次第七回には「突然大地が激しく揺れ、大いなる都の十分の一が壊滅し、七千人が死亡した。そして、第三次の第七日には怒れる神の最後の審判が下る。」第七の天使が鉢の水を空に放つと、聖なる場から大声が響いた。これで終わる！ そのとき稲妻と声と雷鳴が発し、人類が地上に出現して以来、かつてない大地震が襲いかかった。大いなる都は三つに割られ、世界の諸都市も倒壊する。神は大いなるバビロンを想起され、懲罰として杯に溢れるブドウ酒をこ

Helena Carvalho Buescu, *Narration and catastrophe : the 1755*

*earthquake of Lisbon*. pp. 96-98, 102-103. Helena Carvalho Buescu and

Goncalo Cordeiro (eds). *O Grande Terramoto de Lisboa : Ficar*

*Diferente*. Lisboa, 2005.



ここに注がれた。かくしてすべての島は消散、すべての山も消滅した。」  
こうした教義のもとで地震への恐怖が敬虔な民族のなかに醸成される様子を、『リスボン地震』の著者ケンドリックはつぎのように述べている。「キリストはポルトガルの邪悪、とくにリスボンの罪悪について激怒され、ルリサルに住む修道女マリア・ヨアンアの夢幻に現れて、忘恩の民に近々天罰をくだすと告げた。この聖なる女性は一七五五年三月に歿するが、夢幻で示された警告はかない知れ渡っていた。」その後も改悛の情なく人々は罪を重ね、神の裁きは一層厳しさを増していく。「別の修道女はイエスから五たび啓示を受け、聴罪師に災厄の切迫を訴えた。処世の仕方を改めるよう人々に促し、怖ろしい運命を免れるべく祈禱を行うことを求めたのである。」しかし、修道女の預言は無視され、そのまま同年秋の万聖節を迎えたと言う。

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四八三項】 度重なる危険に動揺した人々は、狂気のように絶え間なく叫びながら、田野を動きまわった。画像を手にして、祈禱を唱えると、多くの者が見做って震える声を張り上げる。他の者は黙り込み、放心したように歩いた。

【第四八四項】 修行の場である僧院の廃墟を修道女たちは畏れつつ離れ、救けてくれる縁者や避難できる田野を個々に捜した。引き裂かれたキリスト教徒の妻たちが、泣き叫びながらそれぞれに田野をさまよう光景は、もっとも哀切な事象であった。若干の人々は破壊を免れた修道院の鐘楼に避難し、神の慈悲を待ち望んだ。

【第四八五項】 最初の地震のあとすぐにルリサル・マルケズ宮殿、サン・ドミンゴ教会、城砦福祉施設などから火の手が昇り始め、建物の灼熱と火焰が材木に移った。かくして災厄は倍加し、惨事が一層深刻となった。血に塗れた人も虚弱な人も多くは荒墟から逃れたが、重病で寝たきりの患者は、そのように脱出できなかった。瓦礫によってあまたの生きものも四肢を砕かれたり、板挟みとなり、逃れようと喧噪に鳴き続ける。これらはすべて火災による犠牲であった。語りえないほど凄惨なのである！

*La Bible de Jerusalem*, Paris, 1973. pp. 1455, 1788, 1791, 1795.

*The New Jerusalem Bible*, New York, 1999. pp. 1143, 1393, 1397, 1400.

Kendrick, *op.cit.*, pp.73-74.



【第四八六項】 震動は数時間毎に繰り返し、激しさは減じたものの、同じような脅威を感じさせた。そして、かくも激烈な地震によって大地が割れるのではないかと人々は恐れた。城砦へ火の手が迫るや、そこに蔵される火薬に引火して、王都周辺を危機に曝し、地震を免れた人をも焼死させるとの流言が飛び交った。怯えた心では理性的に思考できず、連夜のように震えた呼吸と慌てた歩調で王都から一レゴアス、二レゴアス、三レゴアス離れた地点へと歩いた。

【第四八七項】 こうした流言は幾人かの悪者に帰せられる。彼らは豪華な邸宅で掠奪できるよう、廃都に化することを企てた。彼らの強欲から広汎な衰弊が惹き起された。なぜなら、若干の地域では火災を阻止できたのに、地震を免れたものさえすべて見棄てたからである。富裕な王都で大半の住民は、邸宅が焼け崩れても、命だけは護ろうと考えた。

【第四八八項】 沢山の修道女と聖職者が荒墟のなかを巡回し、ときには礼拝の式服ですべての死せる者生きる者の赦免を行い、神と聖母の慈悲を哀願した。他の地域では罪人が悔悛と贖罪に導かれる。多くの一般人も教えを説いた。婦人や田舎者さえ説教師に変身したのである。だれもが神の怒りを怖れ、王都とわが命の最終的な破局に怯えた。神への畏敬を説く様々な言葉も無益ではなかった。なぜなら、多くの罪を省みて、素直な心には涙が溢れたからである。新たな震動と火災のなかで悔悛の情が各人に俗事を忘れさせた。断罪の恐怖で体は震え、神の慈愛を求めて心は燃え、繰り返し溢れる涙で息も窒まるようである。再会した人たちは会釈してたがいに赦しを求め、それまでの対立と憎悪を解いた。こうした態度を採らず、いわば憂き世の災難としか思わぬ者もいる。多くの異端者が己の迷妄を恥じらい、恩寵のもとで新たに生まれた。

大地震に襲われたリスボンではまもなく火災が発生し、北東の強風に煽られて低地帯の全域と高地帯の過半へと拡がった。サン・ジョウルジュ城の火薬庫へ引火するとの流言も飛び交う。こうして民衆は地震、津波、火災と三重の災厄に打ち砕かれ、さらにいわば第四の災厄、治安の紊乱に曝される。火災の詳細を語る

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.117-119.

距離の単位レグアは国と時代によって異なるが、この場合一レグアは約四・一キロと考えられる。

まえに、『世界地震通史ーリスボン大地震』の著者は奈落に突き落された彼らの惨状と苦悶をまず記録する。

「聖母マリアや諸聖人の像を」とケンドリックも補足する。「民衆はいかなる際にも手離さず、地震のとき彼らの多くは民衆の多くはそれを握りしめて街路へ逃げた。しかし、そうした貴重な家宝が地震と火災によって当然破損した。個人の祈禱堂に祀る聖像にもポルトガル人は教会に置かれた名高い奇蹟像に劣らぬ信仰を抱き、そうした家庭の守護神ともっとも親密で内面的な関係にあった。」壮麗な教会が倒壊したことに較べれば、そうした聖像の破損は勿論些事である。しかし、「本来敬虔な国民の宗教的な不安と混迷がそれによって倍加され、地震発生の超自然的な意義を一層深刻に意識させた。最初の衝撃が止み、多少考える時間が戻ると、罪深いリスボンが神に罰せられ、救われる方途もないと、哀れな国民はいつまでも痛切に感じた。」多くの聖職者が彼らの悔悟と恭順を求めたことは言うまでもない。「その後数カ月も民衆は度重なる余震に怯えたり、説教や冊子に接するたびに、己の邪悪さと王都への審判をつねに思い知るのである。」

『世界地震通史ーリスボン大地震』

【第四八九項】 国王陛下とご一家はベレンの離宮にいて被災を免れて園へ避難され、そこに建設された立派な仮設御所で数ヶ月生活された。(マヌエル親王だけはネセシダデス宮殿に住んでおられた。)こうして造られた広大なアジユダ宮は、壮大で完璧で木造とは思えないほどである。これら高貴な方々の安否を気遣う人々は、国王ご一家が危機から脱したのを知って、みな喜びに耐えず、リスボン艱苦の当日その喜悦を愛する者や信頼する者と分ち合った。

一七五五年当地では遷都五百年の祝賀が華やかに挙行されていた。「新年と公現節の式典には」と『神の怒りー一七五五年リスボン大地震』の著者エドワード・パイスは書く。これを祝福して「各国使節、貴族、行政者、聖職者が参列して、国王の手に接吻した。」イスラム勢力からの失地回復を完了したアフォンソ三世が、一二五五年コインブラから王都をこの地に移したのである。その後インド航路を開発し、絶対王政を確立したマヌエル一世がテージュ河畔に壮大なリベイラ

Kendrick, *op.cit.*, pp.120-122.

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.119-120.

王宮を創建した。さらに十七世紀前半専制君主ジョアン五世はそれを大規模に改造し、バロック様式の教会も構築した。一七五〇年にジョアン五世は逝去し、新たに即位したジョゼー一世はスペイン国王の息女マリア・アンナ・ヴィクトリアを王妃としていた。遷都五〇〇年の記念事業についてパイスはさらに続ける。「リベイラ王宮に付設された壮麗な新歌劇場が三月の末、王妃の誕生日に開幕し、宮廷の熱狂は著しく高まった。イタリアの建築家ジョバンニ・カルロ・ビビエナの設計によつて奥行七〇ヤード、横幅三五ヤードに造営された。」

大地震のとき国王はベレン離宮において、家族とともに遭難を免れた。ベレンは王都から西へ約六キロに位置し、その河港は大航海時代の主要な重要な発進地であった。しかし、王都における祭日の盛儀には国王の臨席が恒例とされるのに、万聖節の午前郊外にいたことには疑問が生じる。ほとんどの文献は『世界地震通史―リスボン大地震』の記述を超えていないが、マリアナ王妃の書簡をも検討したニコラス・シユラデイの著書『最後の日―一七五五年リスボン大地震における怒り、破滅、理性』ではつぎのように説明されている。「万聖節の日国王は暁に目覚めた。ジョゼー一世、王妃マリアナ・ヴィクトリアは四人の王女を伴つて早朝リベイラ王宮王室教会のミサに列し、すべての聖者、とくにポルトガルを守護する聖ジヨルジュに然るべき祈りを捧げた。」祭日の残りを国王も王女も田園で過ごすよう希望し、四キロ離れたベルム離宮へ王冠馬車を走らせる。あとには聖職者や宮廷人が続き、沿道の群衆から歓呼を受ける。「その一行がベルムの離宮に着くや否や、それぞれ居室に入る国王と王妃を最初の震動が襲った。王女たちは礼拝堂に、廷臣、従者、聖職者、侍女も離宮のどこかにいた。王族、貴族、僧侶、平民のだれもが這い回り、庭園の空地へ逃れた。」

独裁的なジョアン五世のあとを継いだジョゼー一世は、国事にさしたる熱意を示さず、宮廷の要人とくにカルヴァリヨ・イ・メロ、後のポンバル公爵に国政の実権を委ねていた。郷土の子として生まれたポンバルはロンドンとウィーンで使節を勤めた後、摂政マリア・アンナ王太后の恩顧により一七四九年国務尚書、外務・戦争大臣に登用された。外務・軍事担当の閣僚でもある彼は、事実上宰相の役割を担い、地震の直前にはイギリスの経済的圧力を排除する政策に着手していた。離宮近くの仮設御所に避難した国王のもとへ急遽駆けつけたポンバルについ

Paice, *op.cit.*, pp.47-48.

Nicolas Shraday, *The Last Day, Wrath, Ruin, and reason in the great*

*Lisbon Earthquake of 1755.*, USA, 2008. pp.20-21.

ては、ケンドリックの著作を参照する。「有名な話であるが、不運にも若き国王（ジョゼは三六歳であった）が大惨事の怖るべき様相を聞いて動揺し、どうすべきか必死に問い求めたとき、死せるものを埋葬し、生けるものに糧を与えよ！」とポムバルは応答した。「この言葉は別人が発したとの説もあり、真偽を確かめるすべはない。「しかし、それに類した文言で彼が語ったこと、ただちに実行すべき有効な方策を簡潔に表現したことは蓋然性も高く、情緒的で頼りない人の揺れ動く気持を、行動的な人物が直截な良識で一挙に突き破る古典的な範例として、まさしく不滅である。」ただちにポンバルの主導によって緊急措置が立案され、国王の命令として実施された。「国王陛下の名で書かれ、命じられ、行なわれたすべてのこと、すなわち死者を埋葬し、徳義を回復し、食糧を集積し、軍隊を招集し、掠奪を摘発し、アフリカの海賊への防禦を配し、流出者の防止と規制に努め、軍隊へ厳格な訓練を維持し、修道女を保護し、神の怒りを周知させ、国王の一身を護り、反逆者を罰し、イエスズ会士を抑圧し、商業を再生させ、技芸を奨励し、瓦礫を除去し、王都を再建することが、大半はポンバルの先見と英知と権威によるとされる。」

『世界地震通史』リスボン大地震』

【第四九〇項】 最初の夜から悲痛な叫び、絶えざる衝撃、続発する地震へ恐怖、かつまた王都のほとんど全域を襲う火災が、すべての人々の艱苦を倍加させ、財産の欠如と両親の配慮の喪失を痛感させた。大半の家族が引き離され、頼るすべもなく泣き続ける。かくも多くの苦難に耐えうる人だけが、神意により救われると思われた。

【第四九一項】 火焰は家々を焼き続け、地震も衰えを示さない間に、罪深い盗賊は神をも炎をも怖れず、侵入した邸宅で金銭、宝石、衣類を掠奪した。地震でも家が崩れず、火災の被害も受けぬ多くの家族が、盗難によって文無しになる。これらの多くはガレー船を科せられた罪人や牢獄から脱走した囚人に帰せられる。

【第四九二項】 火災の連続と地震の続発によっても私たちは祖国と国土

Kendrick, *op.cit.*, pp.72, 75.

カルヴァリオ・イ・メロが実際にポムバル公爵と呼ばれるのは、爵位を授けられた一六七九年以降であるが、多くの類書と同じく本稿も多くはポムバルなる通称を用いる。



への愛を忘れなかった。神は罪人の赦免を望まれ、魂の救済のため大地を示された。王国のあらゆる都市、町村、地域にいる近親や友人を求めて、その土曜日多くの人々が歩き続けた。以後幾日も悩める旅人が街道に溢れる。近郊の野に留まる人々は、豪華な寺院、壮麗な宮殿、神聖な殿堂、さらには宝石、調度、衣装など多くの富が炎上するのときには目のあたりにした。

オラトリオ会の聖職者アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレドが執筆した『リスボンの地震と火災の物語』は、信頼できる記録としてモレイラ・デ・メンドンサが依拠した文献のひとつである。倒壊した牢獄から多数の囚人が脱走したとの情報も、被災者の恐怖を募らせた。「沢山の沢山の盗賊や悪党が」とフィゲイレドは叙述する。「市中に横行し、どの家でも盗難の危険があり、どの教会でも聖物盗みの恐れがある。なかには残忍で貪欲な輩もいて、遺体すら見逃さず、男性から刀剣、時計、締め金を、女性から扇子、指輪、宝石をそこから剥ぎ取った。」宰相ポンバルの主導で開始された緊急措置は、こうした悪行の取締りを重要な課題のひとつとしていた。こうした犯罪者を峻厳に処分する勅令が遅滞なく国王から発せられ、「その結果数日のうちに三四名が絞首刑に処せられる。内訳はポルトガル人十一名、スペイン人十名、アイルランド人五名、サヴォワ人三名、フランス人一名、ポーランド人一名、フランドール人一名、ムーア人一名であった。」

また、イギリス人貿易商のひとりには壮絶な摘発劇について証言を遺す。「地震がまだ終わらないうちに、無人となった家々を恥知らずの悪漢の一味が掠奪し始めました。自宅の建物が頭上に墜落することを、住民は懸念して留守にしたので、掠奪者を逮捕するよう、また抵抗する際に射殺するよう、警吏へ急遽命令が発せられました。盗賊を捕えるため、幾人かの警吏がある邸宅へ踏み込むところを、偶々私は通りかかります。一味は邸宅から可能な限り奪い取った彼らが、警吏の接近に気づきました。ひとりの盗賊が部屋の窓際でらっぱ銃を示し、なかに入る者はただちに殺すと怒鳴ります。俺たち十人はみな命知らずだ、と彼は

---

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.120-121.

Antonio Pereira de Figueiredo, *A narrative of the earthquake and fire*

*of Lisbon* by Antonio Pereira, of the Congregation of the Oratory,

an eye-witness thereof. Illustrated with notes. Translated from the Latin.

London, 1756. pp.18-19.



喚くのです。自分が可愛ければ、立ち去るがよい。これを警吏らは策略と解したのか、脅迫にすこしも臆せず、邸内へ突進しました。しかし、頑強に抵抗した彼は、ひとりしか立ち向えない狭間に身を寄せて、一名の警吏を殺し、他の一名にも胸元に重傷を与えます。それでも第三の警吏に銃を取り上げられ、即座に逮捕されました。彼は牢獄へ護送され、翌日死刑を執行されたのです。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四九三項】 私はこれらの災害の目撃者である。自宅で最初の震動に襲われ、眼前で庭も崩れたが、神の慈悲で自分は救われると感じた。家族すべてに傷害はなく、被害を免れた自宅にしばらくいた。サンタ・バルバラの野へ行くと、主キリストの慈悲と聖母マリアの加護への祈りが続けられ、私は深く感動したが、祈祷に没入できなかった。数千人が暮らし、数名の神父も住む地域を、城郭炎上の恐怖が無人にしたのである。そこには市参事会の資料保管室もあって、所有地に関する重要文書一万六百件があり、それらを保管するのが私の大切な職務であった。危急の際そうした書類を防備するため、建物の門口を離れてはならなかった。少数の人たちの協力を得て、そこで最初の数日を過したが、惨禍と脅威しか見えず、悲鳴と号泣しか聞えなかった。

民衆の艱苦についてモレイラ・デ・メンドンサの記述はさらに続くが、この書物において唯一ここでのみ、当日の自己の動静に関して一言触れられる。自宅の倒壊を免れたモレイラは、なによりも重要文書の保全のためサン・ジョルジエ城へ駆けつけた。当時市参事館は城砦のなかにあり、平素文書の集積と管理を担当する彼が、勤務先で被害の惨状と民衆の苦悶を目のあたりにしたわけである。

高台に築かれた城砦へは周辺の住民が地震の直後から蝟集し、津波に襲われた河岸の人々も続々と避難した。展望台で最初の震動に襲われたイギリス人ゴダールは低地帯の大規模な破壊を見詰め、なお高台に留まる決意をする。「自分の居所がどこよりも安全であるにもかかわらず」と友人宛書簡で彼はさらに続ける。「目の前で転回される陰鬱な光景を見詰め、実際に落ち着けないでいました。豪

A particular Account of the Late, Dreadful Earthquake at Lisbon. in Shradys,  
*op.cit.*, pp.33-34.

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, p.121.

壮な建造物で持ち堪えたのもあるようですが、家屋、教会、僧院、宮殿が瓦礫の黒山を築いています。他方天の復讐を免れるよう民衆は必死に哀願するのです。こうした状況にあつて彼らの信仰の真摯さは疑うべくもありませんが、そこに溢れる偶像崇拜と迷信の大きいなる混合に正直のところ唾然としました。救われるか否かを完全に決める護符のように、十字架像や聖者の肖像を持ち歩き、熱烈に恭しくそれらに接吻するのです。そうした場で聖職者はきわめて活動的であり、群衆の祈祷を主宰し、赦免をも授けます。彼らの迷妄になんらの敬意も感じないので、そうした営みの埒外にできるだけ留まることが必要でした。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第四九四項】 敬虔な家族や寄り合う民衆が毎日祈祷を続け、聖像ペンハ・フランサの前で聖母マリアの加護を祈った。ほとんどが半裸であつて、みな平伏したままである。近親の安否の知れぬ人は、声よりも涙しか出ない。被害や生死や災厄について尋ねることなどできなかつた。掘り出された生きものは色も形もなく、すべてが悲痛であり、悲惨である。太陽の光が消え、ときに物寂しい夜がいまやきわめて怖ろしく感じられる。なぜなら、喜悅と時刻と調和を告げる鐘が消失し、一切が不気味な沈黙に包まれ、怯える生きものも声すら発しないからである。

【第四九五項】 なによりも神への愛と隣人への博愛が人々の心に溢れた。敵同士が抱擁し、たがいに赦しを求めた。友人や知己が生きているのを知り、たがいに祝福した。肉親や財産をなくした人も親身に慰め合う。徳高く誉むべき行為であるが、ながくは持続しない。

旧約聖書には神が栄華の都バビロンを滅ぼしたと誌されているが、『ヨハネの黙示録』における大いなる都とはキリスト教徒を迫害した暗にローマを意味したとされる。ちなみにエホバを祀る神の都エルサレムは山岳部にあり、他方栄華を極めた背徳の都ソドム、バビロン、ローマは、リスボンと同じくいずれも沿海部

Goddard, *op.cit.*

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.121-122.

の低地に位置し、国際的な商業都市として繁栄した。ヨハネの啓示そのままにリスボンでは大地が揺れ、真昼に暗闇となり、地底から轟音は発した。最後の審判が下されて、怒濤が押し寄せ、殷富な王都が壊滅したのである。

リスボン生れのイギリス人貿易商チェイスはこの日二七歳の誕生日を大聖堂近くの自宅で迎えた。最初の衝撃で全身に重傷を受けた彼は、自力で居室を脱出し、さらに王宮広場まで椅子に乗せて運ばれる。彼が綴った長文の書簡は逝去の直後、一八一三年に公にされており、そこに描かれた王宮広場の様相を以下に抜粋する。

「審判の日が来た、という思いに民衆のだれもが憑かれたように感じました。

善なる業で贖おうと、十字架や聖者像を携えているのです。男も女も地震の合間に祈りを唱和したり、瀕死の者を宗教的な儀式を強いています。大地が揺れるたびに、みな膝を屈して、神よ、赦し給え！と世にも悲痛な叫びを発するので。公安のすべてが停止しているこのとき、私自身の様子が彼らの信仰心に火を付けるのではないかと危惧するため、また極悪人たる異端者に対して彼らの狂わしい怒りがどう燃えるか判らないために、だれが近寄るのも怖れました。」広場の隅に粗末な小屋があり、居合わせた人たちの介護でチェイスはそこに身を置いた。小屋にも瓦礫が降りかかり、広場は高潮で水浸である。そうした光景を二時間ほど眺めていると、「火焰はほぼ真向いにまで拡がり、負傷者で最初一杯であった小屋から私以外はみな立ち去りました。小屋を打破れ！との大声が突然聞えました。小屋のいくつかに火の手が廻ったのです。遅れた者を外に出そうと、すぐに群衆が私の小屋を叩き始めます。小屋が焼け崩れるまえに、辛苦して私は這い出しました。フォルグ氏とほかのひとりが駆けつけ、グレイヴ氏一家のところへ運び、衣類袋の上に寝かしてくれました。そこにいた女は民衆と同じように最後の日の到来と叫び、言い返す私に「いよいよこれから、と言います。なぜなら、向側の銃砲火薬店に火焰が迫り、すぐにも一気に爆発するのを、ここで臨

矢内原忠雄「黙示録」『矢内原忠雄全集』第九巻、岩波書店、一九六三年。

四七三、五三〇―五三二、五三六頁。

太平洋戦争の最中に青年たちの集会で『ヨハネ黙示録』の講義を続けた矢内原は、「ベルリンの焼かれ、若しくは東京の焼かれた日黙示録第一八章の記事をその事実の中に読み取ることもできよう」と戦後に書いた。「原子爆弾の一投によって、強大な近代都市も一瞬にして潰滅する。」戦後の世界はこの警告に耳を傾けず、依然その所業を悔い改めないことを彼は憂慮する。「第二の禍害は過ぎ去っても、なお第三の禍害が不可避に來らざるをえないのである。」

終と彼女が待ち構えるのです。新たな脅威に私は口を緘し、沈黙してふたりで事態を見守りました。」しかし、風が弱まったので、この危機は一旦回避され、広大な税関事務所の陰で彼は夜明けを迎える。「日曜の朝五時頃に風速が変わりました。そして、新たな強風が急速に火の手を大聖堂からこの広場へと拡げます。このため私たちにはただちに移動が必要となりました。黒人の従僕たちが私を税関事務所の向側へ運び、雇主の衣類袋の上に座らせます。火焰はきわめて急速に進み、税関事務所を捉えるや、猛烈な熱風とともに一気に炸裂します。必死に逃れようとしても、到底動けず、燃え出したその場に倒れました。幸いにもフォルグ氏がそこに現れ、多少離れた場所へ移してくれました。すぐに黒人たちも来て、私を再度グレイヴ氏のもとへ運び、さきと同じく衣類袋の上に寝かせてくれました。私たちは王宮のすぐ近く来たのですが、すでにその屋根は崩れ落ちていました。」その後さらに河岸へ移動したが、そこにも火焰が迫り、チエイヌはふたたび王宮広場に戻った。「遠のいたと思った火の手が、低層の建築を伝わって、水辺近くまで迫りました。そこで私たちは急遽広場へ引き返しました。火焰は河岸に積まれた大量の材木で勢いを増し、川沿いにある王宮の一隅に燃え移りました。こうしてだれしも動揺したことに、王宮は壮絶に炎上し、完全に消滅したのです。いまや燃えさかる炎が四方を囲み、河岸の材木が燃え尽きて、灰燼が降ってきてます。私はそれを防ぐため、強烈な熱気にもかかわらず、敷き布団で顔を覆いまして。おりしも二台の幌馬車が手綱を緩めて走る間に、馬具へ火が付いて背面が燃えるため、群衆の前後に全速力で驟馬が疾駆しました。私からは離れており、安全と思ったのですが、すぐにだれかが叫ぶのを耳にしました。あなたが燃える！ まさしく私の敷き布団がパチパチと音を立て、地上に引き落されるのを感じます。付いた火が踏み消され、布団が私に返されました。」こうしてチャイズはまだ燃えていない位置、王宮広場の出口に運ばれる。「一時間ほどのち彼方ではまだ火は燃えているなかで、ポルトガルの婦人が気の毒そうに私の様子を見詰めます。彼女は私の頭上で十字を切り、陰鬱な口調で祈祷を始め、それに合わせて民衆も私たちの周りに円陣を作り、跪拝するのです。ながらく怖れていた事態が生じました。極度の不安を抱いて私はその儀式を見守り、無意識を装うつもりでした。やがて彼女は不意に祈祷をやめ、地震のときのきまり文句、お慈悲を！ と叫ぶ陰惨な高唱がまわりに響きました。火災はさらに危険を増し、無数の人々が私のまわりに蝟集します。新たな痛手を受ける不安を感じましたが、彼らは絶叫するだけで、怖いことはなにも起りません。むしろこうした情景が物珍しいので、覆いを除けて眺めるとすべての男女が膝を屈して祈り、壮大な広場には炎が燃え盛っています。道々で出火の手に追われ、必死に逃れた人々が、衣



類袋を携えて広場に満ち溢れるのです。私たちが身を寄せる一隅、さきにグレイヴ氏一家が避難した王宮の障壁の下を除いて、いまやどこもかしこも燃え立っています。しかも、風は一段と激しさを増し、目の前に押し寄せる火の海にいまも呑み込まれます。ふたたび心神喪失に陥った私は、再三避難を重ねながら、あれほど怖れていた死様をやはり避けえないのか、と絶望的な心境で考えました。こうして血も凍る心境でしばし沈潜するうちに、突然風が衰え、燃え立つ火焰が拡がるのを止めました。」

『世界地震通史ーリスボン大地震』

【第四九六項】 埋葬されない遺体が寺院や街路、さらには建物の残骸のなかに横わっていた。極度の苦悶を続ける重傷者は、生き延びるよりも死を願った。比較的軽度で生き残れる負傷者も、荒墟において救援を得られず、多数死亡した。死者を葬るため迅速に行動するよう、枢機卿総大司教殿下は聖職者と教区司祭に指示された。同じ配慮を国王陛下も示され、人々を適切に導くため国王軍の将校を重要な職務に任命された。聖職者ではないが、こうした活動に幾人かが献身的に従事した。ラフォエス公爵の弟、ジョアン・デ・バルガンサの深い徳業は傑出しており、倒壊した建物の危険を冒して日々働き、あまたの生物を救ったり、多数の遺体を埋葬した。サンパヨール殿も怖ろしい危険をも顧みず、幾人かと協力し、数週間同じような作業を続けた。二四〇の遺体が墓に葬られ、多くの生命が荒墟から救出された。治療のため病院へ運ばれた者もある。天の特別な恩寵によって荒墟で生き残った人のなかには、四日後にペンハ教会で救出されたひとりの男性、七日後にサンタ・マリア大寺院で救出されたもうひとりの男性、そしてカノス街で九日後に救出された少女が含まれる。

【第四九七項】 称賛すべき愛徳をもって若干の貴族は外科医を伴って数日間田野を巡回し、放置された負傷者を治療した。王立誠信病院の指示によってサン・ベント修道院とサン・ロケ修道院に囲地が設けられ、無数の負傷者をそこへ運んで、多くを治療した。彼らの大半は腕や脚を切断し、多数の負傷者が傷口からの壊疽で死亡した。

Thomas Chase, A Account of what happend to Mr. at Lisbon, in the Great Earthquake : in a letter to his Mother, dated the 31st December, 1755.

*Gentleman's Magazine*. 1813, february. volume 83. pp. 109-110, 210-211.

【第四九八項】 王都の中核全体が怖るべき沙漠と化し、火災で黒焦げの高層建築の先端以外には、瓦礫の山と灰燼の山、さらにはいつも大きな人波と豊かな財富で溢れた大道の形跡しか見えない。王都をよく知る人は、どこに踏み入れたか判らず、惨憺たる現実を見て記憶にある形象に困惑する。

【第四九九項】 総大司教猊下はミサの供物を捧げるため、田野に運搬できる祭壇の製作を命じられた。また、万聖節の当日必要なものを持ち運び、サンタ・バルバラ草原でもミサが行われた。

【第五〇〇項】 リスボンの住民は近郊の田野や王都の周辺を放浪した。ここでも神慮の偉大さが明白に感じられた。幾千もの家族が住居も衣服もなく、食物を買う金子も持たず、悪天候から身を護るのに必死であったが、慈愛深く至高なる父に彼らは支えられ、飢餓で絶命する者はなかった。

一九一七年に出版された『古きポルトガルと若きポルトガル―歴史的研究』には、震災直後の宮廷とポンバル自身の行動が記述されている。「王都における社会構造が物質的に破壊され、精神的にも痛撃されたので、政権をリオデジャネイロに移転することが提起された。こうした事態で秩序と自立が回復されたのは、主としてポンバル個人の力能による。練達した外交官であり、学芸の愛好者である彼は、八日間馬車のなかで生きた。被災者を救護し、暴徒を鎮圧し、社会を再編したのである。」

国難に直面したポンバルの果断は卓越しているが、多岐にわたる緊急措置と大規模な再建事業には数限りない協力と支援を必要とした。「こうした状況を救ったのは、」とケンドリックは述べる。「実際にはポルトガル国民であった。なぜなら、一七五五年十一月危機の日々に一国においてもっとも優れた人たちが、果敢に行動し、沈着に義務を果たしたからである。」「こうした人々の功績は同時代の文書に多く誌されるものの、今日に至るまで過小評価されている。「その第一はラフォエス公爵ドン・ペドロ・デ・ブラガンサであって、大審院長として王国の治安を担当した。また第三代マリアルヴァル侯爵ドン・ディオゴ・デ・ノロンハは兵馬総帥ネチウイとして軍規を、アレゲルト侯爵フェルナオ・テレス・ダ・シルヴァはリスボン市参事会議長として経済政策をそれぞれ担当する。さらに首席軍司

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.122-124.

George Young, *Portugal Old and Young, an Hisorical Study*, Oxford, 1917.  
pp. 191.

令官である第二代アブラント侯爵をはじめ、国王軍の高級将校もそうである。リスボン参事会の有能で積極的な構成員も、市民の利益のため油断なく対処し、ときにはポムパルの政策へ反対や批判も表明した。」さらに、「首席技術将校で古文書館担当のマヌエル・デ・マイヤ、上級技術者カルロス・マルデル、さらにユジェニオ・ドス・サントスはリスボン再生への計画と構築で著名であるが、国難の最初かつ最悪の日々にも貴重な働きを示した。」

オランダの週報『ガゼット・デ・ライド』も大地震に関して多くの記事を掲載したが、一七五五年十二月二六日号にはリスボンからの報告として、治安の紊乱と掠奪の阻止が記述されている。「地震の被害を免れた建物も、火災で焼尽したり、混乱に乗じる極悪人の標的となった。あの怖ろしい瞬間に囚人と徒刑囚は鉄鎖を逃れる好機とみなし、すぐさま掠奪や悪事に走ったのである。忌わしくもスペインやフランスの多数の脱走兵、イギリスの幾人かの水兵がこれに合流し、被害が二割も三割も増大した。なおまた、最初の地震の直後七カ所に放火したことを、あるムーア人は処刑の際に認めた。フランスの脱走兵も王宮に隣接するインド商館にやはり放火したと自白したのである。銀塊を蔵する造幣局も同じ運命に曝されたが、ひとりの下級将校の超人的な決意と不屈の武勇によって防禦された。この勇敢な軍人は銃剣と小銃を携え、三日三晩大胆にも部署を護って、周囲をうるつく極悪人を遮断した。こうした壮挙を称えるため、国王はとりあえず彼に大尉に昇進させた。」

ブラジルで採掘された大量の銀を収蔵した造幣局は、盗賊にとつて絶好の標的であった。これを奇蹟的に防禦した将校、バートロメウ・デ・ソウサ・メクシア大佐の姿は、さきに言及した貿易商ブラドックの書簡にも見出される。倒壊した自宅から逃れ、なおまた津波に襲われて、「ついに私は造幣局へ行こうと決意しました。平屋の頑丈な建物で、河に面した部屋のほかは大した損傷を受けぬと思つたからです。毎日護衛していた軍人の一団がそこからまったく消え、一七歳か一八歳の青年がひとりだけ玄関に立っていました。貴族の息子である彼が部隊長でした。たえず大地の震動があり、二十フィートか三十フィート離れた向側の建物もみな揺れるのを見て、そこは非常に危険と感じました。中庭は水浸しなので、私たちは石材と瓦礫に埋まる室内へ避難します。ここで彼と言葉を交わし、感嘆

Kendrick, *op.cit.*, pp.77-78.

*Gazette de Leyde, ou Nouvelles extraordinaires de divers endroits,*

26 décembre 1755. pp.1-2.

の意を示しました。同僚の軍人がみな逃げ出したのに、これほど若い身で勇敢にも部署を護っているからです。大地が割れようとも、と彼は応えました。自分を呑み込もうとも、部署を離れることなど思ってもみない。この若き貴紳の気概によって忒百万の貨幣を蔵した造幣局が掠奪を免れたのです。これほど怖ろしい状況でないときすら、かくも平靜かつ沈着に行動する人物を見たことないし、彼に報いるすべを知りません。」

『世界地震通史ーリスボン大地震』

【第五〇一項】 慈父の心と王者の勇氣をもって徳高き国王陛下は、広大な田野に留まる幾千人にも必需品を支給するよう命じられた。ベレンへ移された者には、必要に応じかならず医薬が供される。多数の王族や沢山の外国人にも仮設小屋や板塀用の木材が調達された。

【第五〇二項】 この災厄に率先して王族のアントワーヌ殿下、ジョゼ殿下、ガスパル殿下は、寛仁と高潔な気概をもって対処された。パルハラ宮殿の広大な緑地では、庭園と森に千人以上が収容された。みな充分な食糧を提供され、数ヶ月そこに留まる。彼らの需要を充たすため、沢山の衣服も送られた。こうした親身な厚意と大いなる博愛に対して到るところから讃辞が寄せられる。その名声は世界に伝えられ、諸殿下の徳業が遍く称讃されるに至った。

【第五〇三項】 すべての聖職者は僧院の門戸を開け放ち、幾百もの家族を受け入れた。あらゆる場で多くの博愛が発揮されたが、改革的な聖アウグスチヌス修道参事会員と博学のサン・フィリップ・ネリ信心会員(オラトリオ会士)がとくに際立ち、殻らはサン・ヴィセンテ修道院とネセシダス修道院の構内に多数の家族を避難させた。

【第五〇四項】 多くの貴族や個人が博愛という美德を実践し、能うかぎり最大の寛仁をもって邸宅や農園にあまたの民衆を寛大に受け入れた。すべては徳業の機会を授けるといふ神の意向である。主イエスは貪欲な者の多くを気前のよい慈善家に変身させた。つねに神慮が無限に偉大であることに感嘆する！

Braddock, *op.cit.*, pp. 34-36.

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.124-125.



聖職者も民衆に悔悛や贖罪を説くだけでなく、救援活動にも重要な役割を担った。次第に独裁色を強めるポムパル政権のもとで、やがて宗教団体に圧力が加えられ、そうした功績が覆い隠される。また、外国人による証言は当地における異様なまでの祈祷や儀式に眩惑され、ともすれば地道な努力と功績を見逃している。「地震の直後ただちに立ち上った聖職者集団が」とケンドリックは論述する。「拳って献身的かつ英雄的に行動した功績を軽視してならない。枢機卿総大司教が真摯に教会を先導されたことは正確に記録され、様々な宗教団体、とりわけオラトリオ会神父、イエスズ会士、ベネチクト会修道士、アウグスチヌス会修道士も目覚ましい働きをした。だが、王都のもっとも罹災した地域で尽くした普通の教区聖職者については称讃が足りない。地震の証言を読む者は、彼らが大きな危険と怖るべき混乱のなかで責務を貫き、果敢かつ献身的に行動したことにだれしも感銘をうける。地震や火災で家を失った民衆に彼らは天幕や小屋を用意した。惨事のと被害を確認する主要な機関となり、教区の生存者、犠牲者、流失者について公式の調査に関与したのである。被災者のため長期にわたり仮小屋で救護を行った事例もある。たとえば、サン・ジュリアの教区司祭は王宮広場へ移動して木造の小室のなかで二年間働き、焼尽したサンタ・マリア・マダレーナの教区聖職者も一時同居した。サンタ・ジュスタ、サンタ・ルフィナ、サン・ニコラウの教区もロシオ広場の仮小屋を本部とし、そこには異端審問所も木造の暫定事務局を置いていた。倒壊したサント・クルス・デ・カステロ教会の教区司祭は教区内に設けた小屋で職務を続け、城砦の丘の南、壊滅したサン・ペドロ教会の教区聖職者はしばらく河畔の倉庫を教会として使用した。」

### 第三節

大火の規模と範囲、教会と邸宅の焼尽、王都中心部の絵図、王宮と殿閣の炎上、蔵書・図書館の焼失、エルセイラ伯爵の蔵書、教会と殿閣の壊滅、サン・ヴィセンテ・デ・フォラ大寺院の倒壊、財富の喪失と経済的損失  
併せて『世界地震通史―リスボン大地震』第五〇五項から第五二九項まで

大地震と津波に加えてリスボンでは大火が一週間燃え続けたとされる。地震

に伴う火災の被害は、古来日本において甚大である。一七〇三年十一月二三日の元禄地震ではまず桜田の甲府中納言綱吉の屋敷から火の手が昇り、江戸各地での火災は十二月初めまで続いた。とくに十一月二九日の大火は、本郷、下谷、浅草、深川と類焼し、無縁坂や筋違橋、松平飛騨守・徳川家宣・京極兵部・秋元但馬守等の屋敷、佐山庄左衛門・稲富喜八郎・浅井勘兵衛等の町屋、天現寺・竜泉寺など谷中の寺院二七などを焼き尽した。一八五五年の安政江戸地震については小石川辺、浅草駒形橋辺、永代橋辺など二三面にわたる詳細な焼失図も保存されている。ある住民の証言によれば、「南は芝山下幸橋のうち、西は馬場先八代須河岸小川町、北は本郷池のはた下谷浅草千住に至り、大川の東は本所深河の辺京橋鉄砲洲霊岸嶋まですへては三十余か所とかや、一夜のほとにことごとく焦土となる。」 関東大震災や阪神大震災に伴う大火の大惨事はよく知られている。

地震に伴う大火について海外の資料は比較的乏しいが、リスボン大地震と一九〇六年のサン・フランシスコは被害の最たるものである。「地震直後の火災による凄惨な被害の典型は、」と地震学者リヒターは叙述する。「サン・フランシスコと東京の惨事である。言うまでもなく当然人口稠密な地区の危険は、火災が日常的な種々の営みから地震よりもはるかに多く発生することである。消防機関と行政組織はそうした非常事態を覚悟する必要がある。」焼失した建物の数を安政大地震の際三万五千件、関東大震災の際四四万七千余件と記しつつ、サン・フランシスコ大地震での火災について彼は言う。「一九〇六年の大地震は一九二三年の関東大震災等に較べれば、それほど激甚ではなかった。しかし、それは地震と火災によって広大な都市の大半を破壊し、四億ドルの損失と七百名の死亡を惹き起した。」火災は三日間続き、その損失額は全体の二割程度とされる。「サンアンドレアス断層に位置したため、主要な水道管の機能が破壊され、地震の衝撃が都市の給水機能を麻痺させたのである。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五〇五項】 地震と火災はきわめて広大で人口稠密な都市の主要かつ最良の地域を崩壊させ、破滅させた。地震による様々な破壊について述べた

東京大学地震研究所編『日本地震史料 第二巻別巻』東京大学地震研究所、一九八五年。九五―九七、九八―九九頁。

同書、『第五巻別巻二―』 一三三―一三五、五七八―五七九頁。

Richeter, *op.cit.*, pp.382, 477 480-481, 561.

あとは、火災による大規模な被害についてまず語ろう。

【第五〇六項】 旧市街の大半と新市街の多くが火災によって灰燼に帰した。火災の被害を受けた範囲を描けば、円周一レグア（約五・五キロ）以上に及ぶであろう。火の手はサン・パウロ教会から始まり、沿海部の広域へ拡がった。円周はこの教会からルモラレス、王宮広場、ナオス河岸、王宮広場、シダード河岸、カエス・デ・サンタレムを経て王の泉にまで到る。そこからサン・ペドロ拱門とサン・ジョアン・プラサ教会の背後へ登り、サン・ジョルジェ教会へ向った。さらにそこからサント・エロイオ修道院のサン・マルチノ教会正面へと登り、サン・バルソロミウ教会正面まで拡って、城砦をも脅かす。坂を下って火の手は、アンソルフア門、サン・パトリシオ・コレジオ、サン・マメド教会、城砦海岸へ進み、サン・クリソヴァオ教会の側面と正面を経て、ボラテーム井泉裏手のサン・ジユスタ教会の背後へ達した。王立病院と聖ドミンゴス修道院へも燃え拡って、ロシオ広場で修道士小路へ転回し、カダヴァル公爵の宮殿を通り、ガリシア街、コンデッサ街、オリビエラ街を経て、三位一体修道院に入り、サン・ロケ教会裏手に登って、ノルテ街、カラサテス街、バロツカ街、アタラヤ街のそれぞれ大半を焼き尽す。さらに改宗者修道院門前のカルカダ・デ・コンプロ街を横切ってシヤガ教会を通って、そこからサン・パウロ教会の背後、火の手に描かれた円周の起点へ帰還したのである。

【第五〇七項】 こうした円形のなかでいわゆる河岸地区、ノーバ街、ロシオ、そしてレモラレス、アルト・バイロ、リモエイロ、アルファマの諸地域の大半が火災によって完全に壊滅した。これらは首都を構成する十二地区のうちもっとも富裕で人口稠密な七つあたる。火焰に焼き尽くされた王都の広大な部分には総大司教教会、およびサンタ・マリア大寺院（旧リスボン大聖堂）、およびサンタ・マリア・マグダレーナ教会、聖母受胎教会、サン・ジユリアオ教会、殉教者教会、秘蹟教会、サン・ニコラウ教会、サン・マメード教会、サン・バーソロミウ教会、サン・ジュルジュ教会、サン・ジョアン・ダ・プラサ教会の諸教区が完全に含まれる。また、サン・パウロ教会、托身教会、サンタ・ジユスタ教会、サンタ・カタリーナ教会、サン・クリストヴァオ教会の諸教区（これらでは教会も焼失した）、および城砦にあるサンタ・クルズ教会の教区もそうである。

【第五〇八項】 この圏内では豪華な三位一体修道院、カルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、アイルランド・ロザリオ修道院、聖霊修道院、ボアホラ修道院、キリスト教団修道院、サン・ドミンゴス修道院、サント・エ

ロイ修道院が、それぞれ豪華で壮麗な教会とともに灰塵に帰した。城砦福利施設、サンタ・マリア・マグダレーナ改宗者修道院、サン・ロレンソ・カルモマリア孤児院も同じように被害を受けた。

一七三〇年刊行の『都市リスボン細叙』には王都の中心部がつぎのように描かれていた。「王宮はテージュ河畔の首都中枢、王宮広場と呼ばれる地点に位置する。王宮の正面は広場の縦幅全長を占め、端には壮麗な別館もあって、その横には船舶が錨を降している。「港湾の情景や遙かな海洋が心惹くことは言うまでもない。「王宮の殿閣は壮大であって、きわめて豪華に設備されている。片方は大河に沿い、他方は街路に面する。王宮の一部とされる中庭の周囲には、箱状の建造物が柱廊で支えられている。多数の商人が商易可能な稀有な品々を売り捌く。「近くのロシオ広場一帯も枢要の地であって、広大な関税会館など財務や司法に係わる公的機関が連なるとともに、食肉の店舗や小間物屋の拱廊もみられた。異端審問所、ドミニコ会大修道院、総合病院もこの広場に位置する。「総大司教座は」とこの地誌の無署名著者はさらに続ける。「王宮の礼拝堂である。ここは月並な建築と壁画にすぎないが、きわめて広壮である。内陣の祭壇のほか十二の祭壇があつて、いずれも壮麗に飾られている。宝石を鑲めた二段の特別席が設けられ、普通国王と王妃がその席でミサを聴く。日曜と祭日には通常総大司教が司式にあたる。」祭壇では十八人の聖堂参事会員がみな僧帽を被つて大司教を補佐し、三十人あまりの聖歌隊がこれに加わる。「これら僧帽の聖堂参事会員は第一級の貴族のなかから選抜される。」司教の地位を授かり、国王から高額の年金を受ける彼らは、「聖務をきわめて厳密に遂行し、自己の威厳を完全に発揮するため、通常駕籠に乗り、徒歩の従者六名を従える。」

また、フランサ著『啓蒙の都市ーポソバルのリスボン』には深甚な震災を蒙つたバイシャ地区について、中世からの形成過程をつぎのように記述されている。低地帯の中核とも言うべき「ロシオの四辻は民衆の広場であり、万聖病院、ドミニコ会修道院、異端審問所、巨大で不粋な構築も建っていた。玄関で囲まれた小さな辻や塔を鼎立した街角が密集し、狭苦しい道が迷路のように曲りくねり、吐気を催すほどであった。「この地区には要をなすペルリンホ広場と入り混つて、商人通り、金銀細工師通り、鉄格子通りも見出される。「これらの地名は職人や

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.125-127.

Description de la ville de Lisbonne, *op.cit.*, pp. 11-12, 14-8.



商人を特定の地区に定住させる政策、十四世紀末から王権が正式に実施した政策に呼応するものであった。」また、テージュ河と港湾に近い河岸地区もいち早く開発され、「そこには海運に係わる人々、水先案内人、船大工、香料貿易商などのため、質素な住宅が建設された。とりわけ一五三一年の地震以降こうした新規の人々が新しい地域を求めたのである。三年以内に竣工しなければ、重税を課するとの制約のもとで、それらは大急ぎに施工された。険しい坂が多く、起伏に富む土地であるため、すべての道路がぐねぐねとし、登り降りするのである。」

これらリスボン中心部を焼尽した大火の様相がケンドリックの著作ではつぎのように描かれる。「怖るべき火焰は北東の風に煽られ、熾烈に燃え、地震後一週近くも鎮火しなかった。王都中心部の低地帯全域と隣接する丘陵斜面の大半を焼き尽した。同時代の証言によれば、火の手は廃墟の数カ所、すなわちカルモ修道院、三位一体修道院、ルリサル侯爵邸、アヴェニード東側アヌンシアード広場から昇り、すぐさま大火となってロシオ広場から河岸へ延焼した。さらにそれは城砦丘陵の西斜面と南斜面へと燃え上り、バイシャ地区の反対側、カルモ山稜からアレクリム街へ、かつまた丘陵頂上の傷病教会にまで進んだ。」「その火焰は」と彼はさらに述べる。「リスボンのもっとも富裕で人口稠密な地域を焦土に変え、そこでは灰燼に帰した家屋の下に数百の遺体が埋もれる。」「都市中心部を焼尽した凄惨さにおいてヨーロッパ史上かつてなかった大火である。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五〇九項】 サンタ・マリア大寺院では時計塔をはじめ古式で雄大な建造物が地震によって倒壊し、教会の炎上によって礼拝堂、事務所、控室もすべて破壊されたものの、壮麗と讃えられる優美な立像、聖母マリア奇蹟像とその衣装がなんらの傷痕もなく護られた。

【第五一〇項】 豪華なサン・アントニオ教会は聖アントニオその人が往事暮した旧蹟に建立されるが、かつてリスボン分割のとき市参事館であった壮麗な建物とともに、また堂内を飾る沢山の銀細工や豪華な装身具とともに、サンタ・マリア大寺院の教区壊滅の際に焼失した。その裏手にあって聖歌殿は地震による破壊を受けなかった。人々はそこで驚くべき聖アントニオの奇蹟を目撃した。中心部の礼拝堂ではきわめて炎上が激しく、銀や銅などの祭

França, *op.cit.*, pp. 25-26.

Kendrick, *op.cit.*, pp.311-312.

具まで溶解したのに反し、聖歌殿はそこからやや離れ、地震と火災を免れたため、燈明や多くの装飾に照らされたまま、祭壇の聖アントニオ像は安泰であった。

【第五一一項】 同じくこの教区で愛徳信心会の教会と建物が炎上し、マダレーナ教区では孤児院の教会と施設、聖霊礼拝堂から独立したサンタ・アンナ慈愛病院、サン・セバステイア教会、聖母受胎教会とキリスト教団修道士コレジオ教会、さらにサン・ジユリア教区ではオリヴェイラ古礼拝堂、サン・ニキュラオ教区ではパルマ礼拝堂、ヴィクト礼拝堂とその病院、キリスト昇天教会、サン・ジュスタ教区では万聖節王立病院、アンパロ礼拝堂、難病治療病院、慈恵礼拝堂、サン・バーソノミュー教区ではサンタ・カテリーナ・コレジオ、托身教区では壮大なイタリア・ロウレト教会、シヤガ教会、アレクリム礼拝堂である。サン・パウロ教区では慈恵礼拝堂、通称では聖体礼拝堂が地震と火災を免れた。

【第五一二項】 焼尽した殿閣を挙げると、第一はリベイラ王宮であって、マノエル国王によって創建され、引き継ぎフィリップ二世のもとで豪華にされたあと、今世紀に至り贅沢な建造による優美な広い回廊を増築され、先頃きわめて壮麗な王立歌劇場がヨーロッパ諸国で称讃を博し始めていた。ついで孤児院を付設するコルト・レアル宮殿（以前にも大火を蒙ったことがある）、ブラガンサ公爵邸（宝物殿とされていた）、アラフォエンス公爵邸、アヴェイラ公爵邸、ヴァレンス・アンジェジャ侯爵邸、フロンテイラ侯爵邸、カスカエス侯爵邸、サン・ティアゴ伯爵邸、リベイラ伯爵邸、キユキユリム伯爵邸、ヴィラ・フォル伯爵邸、ヴァラダレス伯爵邸、アヴェイラス伯爵邸、アトウギア伯爵邸、ヴェミエイロ・アルバ伯爵邸、バルバセーナ子爵邸。やや遠いがルリサル侯爵邸もこのとき焼尽した。

【第五一三項】 同じく被害を受けたのは王立税関所の大建築、インド商館、測候所、領事館、王立会計院、七商館である。王宮広場、ナオス河岸、コンソラカオ門前の国際市場とその倉庫、王立裁判所法廷、行政評議会、財政評議会、海外評議会、信教評議会、ブラガンサ館、戦時会計総院、将校宿舎、貯蔵倉庫とその広大な事務局、王国・戦争・航海の諸省庁もこれに含まれる。なお、省庁の本部は王宮の敷地であり、それらの文書保管所では無数の蔵書や書類を喪失し、国家と諸機関に多大の損害を与えた。また、アルジューベのふたつの聖職者懲戒所とトロンコ聖職者懲戒所も同じく炎上した。

これらリスボンの王宮広場や周辺の建造物は『スペイン・ポルトガル周遊』でも以下のとおり紹介された。「ここでは豪華な建造物が公私にわたりきわめて多い。また、壮麗な広場もいくつかあって、その第一は王宮広場にほかならぬ。一方では大河と田園に望み、他方では王宮をはじめ見事な建物に囲まれた美しい地点である。この広場で火刑の儀式が行なわれた。すなわち、神聖なる異端審問所によって死に値するとされた罪人が処刑された場である。その儀式を国王は窓越しに眺められた。闘牛がみられたのもここである。」王宮からは遙かに海を望み、船舶、人家、修道院、城砦も眺められる。「王室の蔵書もきわめて価値あるものとされ、十五世紀アルフォンソ五世の創意に始まり、年々増補されている。」しかし、イギリス人によって綴られたこの案内書には、イベリア半島の宗教裁判についてやや批判的な筆致が認められる。「ドミニコ会の教会も典雅である。この教会には物珍しい要素がいくつもある。まず大きな門口の上を仰ぐと、聖なる異端審問所の判決で火刑に処せられた人物の名前と肖像が見られる。また、一方には救世主の家系図が、他方には聖ドミニコの家系図がそれぞれ大理石に刻まれている。この修道院の近くに聖なる館、すなわち異端審問の聖地が位置する。広い玄関に美しい噴水があり、大理石の美しい像も配されている。リスボンへ持ち込まれる一切の書物が、ただちに審問所に運ばれ、検閲を受けるのである。」

王宮の形成過程についても以下の通り言う。「十七世紀四半期第二には」と歴史学者フランサは叙述する。「リベイラ王宮が改築され、壮麗になった。国王エマヌエルのもとで建造された建築は、息子ジュアン三世によって変容され、テルジ別館が変則的に片端へ分離された。しかし、後者はより重要な増築を構想したのである。」十八世紀にはこの王宮にさらにふたつの偉観、教会と劇場が付設される。王都の西部には別の広大な王宮が聳えていた。「コルト・レアル王宮はリベイラ王宮についてもっとも重要である。十七世紀四半期第二の作者不詳の絵画にはインドへ出発する聖フランシスコ・ザビエルが描かれ、リスボンの情景としてコルト・レアル王宮の偉観が示されている。」そこには一八五の部屋と一八の広間があった。「カステリア様式の巨大な箱形の建造物であって、横幅は約五〇メートル、四つの正面に各階十一の窓が配されている。両端には大きな突塔が

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.127-129.

Rhys, *op. cit.*, pp. 266-268.

ある。しかし、この王宮の独創性は三七メートルの両翼であつて、イタリア風庭園を中央に抱え、河岸に至るのである。両翼の正面には各々九つの窓が配され、テラスを備えている。テージュヨの眺望はリスボンに不可欠な魅力であり、王宮の建設者はこれを熟知したと思われる。堤防を障壁とする庭園は栄典を行う会場でもあつた。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五一四項】 火災によつて焼尽したもつとも貴重な品々のなかで、あまたの浩瀚な書籍の喪失が学者には痛恨の極みである。随一とされる王室図書館には貴重な書籍がきわめて多数蔵されていた。そこには英知と度量の発露として国王ジョアン・マクシモ五世が、近年の莫大な書物に加えてヨーロッパで涉獵されたあらゆる古書や優れた稿本の複写を納められたのである。

【第五一五項】 ルリサル公爵の広大な四棟の建物は稀覯本や優れた稿本で満たされ、飾られていた。博学のエリセイラ伯爵のもとで始められたのち、それはフラシスコ・ザビエル・メネゼス伯爵によつて完全なまでに追補され、後者の英知と該博な識見は没後ポルトガルと全ヨーロッパで称讃を博した。

【第五一六項】 サン・ドミンゴ修道院の図書館はふたつの広大な建物から成り、博学なベネディクト修士フランシスコ・レイタオ・フェレイラの蒐集による多数の稀覯本や稿本を蔵している。ふたりの司書の協力を得てこれらの公刊と増補が実現したのは、マヌエル・ギルヘルム神父の高配による。

【第五一七項】 聖霊修道院にも広範で精選された図書館およびマリアナと呼ばれる別の図書館があり、ドミンゴ・ペレイラ神父によつて設けられた後者は、聖母マリアに関する膨大な蔵書として尊重されていた。

【第五一八項】 同じようにカルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、三位一体修道院、ボアホラ修道院に蔵される由緒ある優れた書籍も灰塵に帰した。それらと同じくどの豪邸でも貴重な蔵書が焼失した。

【第五一九項】 個人の蔵書も多数失われ、なかでも異端審問官シマール・ジョゼフ・シルベイロ・ロドのあまた精選された書物が非常に惜しまれる。五人の豪商の邸宅ではフランス語、スペイン語、イタリア語の書物が、またポルトガル書籍商の二五の店舗と邸宅でも大量の優秀な版本が焼失し



た。

【第五二〇項】 地震によりサント・アンドレ教区教会、サント・カトリ  
ーナ教区教会、サン・マルティノ教区教会、サン・ペドロ教区教会、ペーナ  
教区教会、救援教区教会、サルヴァール教区教会、サン・ティアゴ教区教  
会が完全に破壊された。また、ドス・アンジョス教会、サン・クリストヴァ  
オ教会、サンタ・クルズ・デ・カステロ教会、サント・エステヴァオ教会、  
サン・ジョゼフ教会、サン・ロレンソ教会、サンタ・マリナ教会、メルセス  
教会、サン・トメ教会は多大の被害を受けたが、倒壊には至らなかった。

蔵書の焼失に関する痛恨は、この震災記録のにおいてとくに心惹かれる箇所であ  
る。歴史家であるモレイラ・デ・メンドンサだれよりも蔵書の価値を知り、その  
焼失を傷嘆したと感じられる。彼が敬愛するエリセイラ家は、またして歴史の嵐  
に曝されたのである。ルリサル公爵の次男であり、第三代としてエリセイラ伯爵  
をそうぞくしたルイス・デ・メネゼスは、ペドロ二世のもとで大蔵大臣に登用さ  
れた。コルベールの重商主義を範とする彼は、外国勢力の圧迫のなかで毛織物な  
ど自立産業の育成を試みる。しかし、地主貴族の執拗な反抗によって、経済改革  
は挫折し、彼自身は自殺に追い込まれた。第四代エリセイラ伯爵フランシスコ・  
ザヴィエル・デ・メネゼスも宮廷の要職を勤めたが、なによりも博学の士として  
遍くヨーロッパで知られたであった。「エリセイラ伯爵はさまざまな学問、」と  
現代の『ポルトガル歴史事典』にも誌されている。「とくに数学に造詣が深かつ  
た。アカデミアでも諸問題に関する弁論と論究において抜群であり、フランス語、  
イタリア語、スペイン語にも精通していた。ポルトガルでも国外でも彼の参加を  
希望しない学芸団体はなかった。一六九八年に一般アカデミアが革新されると、  
二三歳にしてその会長に選出された。さらに一七一七年王宮にポルトガル・アカ  
デミアが王宮に創設されると、その総務兼理事に任ぜられ、一七二〇年ジュアン五  
世により設置されたポルトガル王立歴史アカデミアでは五名の理事・校閲者のひ  
とりとなった。学術的な団体と同じく宗教的な会議にも参加し、一七一五年ロー  
マ教皇大使、フォオラオ殿下の公邸で開かれた集会では、世界会議の審査部門を担  
当して、宗教史、神学、教皇典範に関する該博な識見で称讃を博した。ローマの  
アルカディア・アカデミアとイギリス王立協会もその会員に彼を迎え入れる。韻  
文による彼の創作はあらゆる文学的会合が読まれ、絶賛される。」ヨーロッパ各

地の貴顕もエリセイラ伯爵に敬意を示した。「アカデミアでなされた彼の称讃演説を、一七二二年四月二九日教皇イノセント十三世は小勅書で祝福された。フランスのルイ十五世は五巻の蔵書目録と二一巻の版画を彼に贈り、稀有な御業としてパリの宮廷を驚かせた。ロシアのアカデミアも優雅な挨拶状を添えて、そこに属する学者の業績十二巻を送り届けた。イタリア、ドイツ、オランダ、フランス、スペインのもっとも著名な哲学者たちも彼との交流を好み、ムラティ、ピアンチミ、クレスシンベニ、デュモンなどが書簡を寄せた。」『ポルトガル歴史事典』によれば、彼の蔵書目録は膨大であるが、現在もルジターナ図書館で確認できる。「エリセイラ家の蔵書はザヴィエル・デ・メネゼスに補強されて一層貴重なものとなり、父祖から継承したものを含め、1万5千巻以上であったと推測される。国王直筆のシャルル五世史、ハンガリー国王が所有したあらゆる草木の天然色植物誌、等々がこの蔵書を比類のないものにした。一七五五年十一月一日の地震で伯爵の邸宅が倒壊し、それに続く火災によって美事な蔵書が灰塵に帰したのである。」 第四代エリセイラ伯爵は一七四三年に逝去していたが、大火による蔵書の焼尽は国家的な損失であった。

こうした書籍の尊重はポルトガルにおける上からの啓蒙とも係わるように思われる、多くの王侯貴族にとって貴重書の蒐集は高尚な趣味であった。「蒐集家としてジョアン五世は、」とフランカは書く。「リベイラ王宮やマフラヤコインブラに膨大な蔵書を集めた。書籍や稿本を買い求めるため、パリやローマなどの地に代理人を置き、外国の書店が荷造りした。だが、エリセイラ伯爵のような稀有な貴族、王立歴史アカデミーの会員、僧院の修道僧のほかはだれも読まなかった。」美術品や装飾品だけでなく、書籍の「購入と需要においても宮廷は挙って国王に倣った。大使として派遣され、外国で暮らした貴族がとくにそうである。なかでもローマ大使であったフォンテス・アブランテス公爵ルイ・ダ・クンハ、さらにはタルカ公爵、エリセイラ家、カダヴァル家、アタライア家は国王にとって模範となり、蒐集家の道へと誘ったのである。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五二一項】 大きな建造物はすべて深刻な破壊を蒙った。豪華な聖ア

Ericeira ( D.Francisco Xavier de Menezes, 4 Code da ) Portugal Dicionário  
históric/ online.

França, op.ct., p. 45.

ウグスチヌス会サン・ヴィサンテ参事員教会では穹窿も破壊され、正面を飾る碧玉や宝石の彫像も崩れたが、修道院の被害は軽少であった。慈恵修道院と慈恵礼拝堂では大きな教会、充実した聖器室、修練士の館、麗しく浩瀚な図書館が倒壊した。ここでは蔵書も大きな被害を受け、美しく新しい回廊、さらには鐘楼などの建物も著しく破壊された。同じ修道会のペンハ・フランカ修道院では教会が倒壊し、僧坊と回廊が著しく破壊された。この宗派に属するサント・アンタオ（父）修道院では教会が倒壊し、僧院が破壊された。イエズスのサン・アンタオ・ドス・パドレス・コレジオでは高貴な教会の穹窿が墜落し、僧院の広い廊下が著しく破壊された。サン・ロケ誓願所（サン・ロケ教会）では正門が倒壊し、塔などもまた破壊された。コトビア修道院は教会と僧院に被害を受けた。サン・フランシスコ・ザビエル・コレジオ、ナザレス・アロイオス修練院、そのほかイエズスの建物すべても同じような状況になった。サン・フランシスコ第三修道会のイエズス修道院も教会と僧坊が著しく破壊された。サン・パウロ修道院の崇高な聖体は宝庫に蔵され、損傷を免れた。神慮による破壊は巨大であり、イギリス系のサン・ペドロ・コレジオとサン・パウロ・コレジオへも及んだ。サン・ペドロ・アルカントラ修道院とその教会も瓦解した。カプチン会サント・アントニオ修道院も著しく破壊され、その教会も倒壊した。サン・ベント会エストレラ修道院では教会が全壊した。荘重なサン・ベント修道院、イエズス・ボアモルテ修道院、カルメル会素足アレマエン修道院とそのサン・ジョアン・ネプミュセノ教会は軽少な被害であった。

【第五二二項】 尼僧修道院、サン・チャゴ騎士団修道院とサン・ベント・デ・アヴィス騎士団托身修道院は多大の被害を受けた。サンタ・アンナ修道院では教会および古い僧坊の片側が崩れた。サンタ・クララ修道院では教会と修道場が全壊に近い。望徳修道院でも多くの箇所が破壊された。聖母マリア修道院では外壁に被害を蒙り、サンタ・アポリア修道院も同じ結果である。受胎告知修道院とその教会も多大の被害を受けた。サンタ・モニカ頌歌修道院では教会を別として全壊した。救世主修道院の被害は小さいが、教会が倒壊した。受難修道院も同じ結果である。薔薇修道院とその教会は多くの被害を蒙った。トリナスド・モカンボ荘厳修道院も著しく破壊された。しかし、カンポリド施療修道院は損傷を免れた。カルメル会サント・アルベルト修道院は多少被害を受け、カルダエス聖母受胎修道院はかなり損傷した。十字架修道院はほとんど破壊された。ベルナルド会ナザレス修道院は全壊した。

【第五二三項】 アンパード孤児院、保護施設、さらにはおよびサン・クリストヴァオ教区の保護施設、改宗者のための聖霊カルダエス修練所も多大の被害を受けた。

【第五二四項】 サンタ・クルス・デ・カステロ教区ではサン・ミゲル僧院と聖霊僧院、アンジョス教区ではモンテ僧院（サン・アゴステイノ僧院の旧蹟）とイエスズ・マリア・ジョゼフ僧院が多大の被害を受けた。同じ結果に至ったのは、サント・エステヴァオ教区では施療教会とその病院、サン・ジョゼフ教区ではサン・ルイズ・ダ・ナカオ・フランザ教会、救援教会教区では保健教会、処罰教会教区では由緒あるサン・ラザロ僧院、托身教会教区では清貧聖職者聖母受胎教会である。

「総じて教会は非常に麗しく、」と『スペイン・ポルトガル周遊』には描写されていた。「大聖堂、ドミニカ教会、ロレント教会、慈悲教会、サン・パウロ教会、サン・ビセンテ教会、サン・ロケ教会がとくに名高い。」アルファマ地区に位置する聖アウグスチヌス会慈恵教会では、貴族や名家の人でなければ、修道院に受け入れない。この教会はきわめて壮麗であつて、ポルトガル随一、ヨーロッパ屈指の聖器室は聖者の金色の遺物で飾られている。また、さらに八フィートほどの高さの麗しい十字架が納められ、金製で非常に重いため、祈禱行列の際運ぶには司祭を補佐する三人の男が必要である。十字の端々にはダイヤモンド、ルビー、真珠、サファイヤ、エメラルドなどあらゆる貴重で高価な宝石が鏤めてある。そして、十字の中心には一・五平方インチの水晶の奥に真の十字架が祀られ、祈禱行列の際運ばれて、万人から絶大な崇敬を受ける。」また、反宗教改革を推進し、日本へも福音を伝えたイエスズ会は、ポルトガルで強固な基盤を築いていた。「イエスズ会士はリスボンで四つの修道院を有する、」と同じくライスは描写する。彼らの本部は聖ロカに因み、壮麗である。教会も広壮であり、典雅に裝飾されている。そこでは聖イグナティウス・ロヨラの生涯が、数幅の絵画に描かれている。彼はこの宗派の創始者で一四九一年（ポルトガルの）ビスカイで生まれた。聖器室も貴重な絵画で飾られている。」

豪華な教会の壊滅としてシユラディ著『最後の日』リスボン大地震における怒り、壊滅、理性』にはサン・ヴィセンテ・デ・フォラ大寺院の事例が詳細に叙述

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.131-133.

Rhys, *op. cit.*, pp. 267-269.



されている。十二世紀にムーア人からの国土奪還を祝して創建されたこの教会は、一五八二年にアルファマ地区北端へ移築された。リスボンの守護神が祀られ、歴代の国王が葬られた聖堂として、地元の住民もとくにここでミサに列するのを願った。「建築家のジュアン・デ・ヘラーラとフィリップ・テルジが」とその建造についてシユラディは述べる。「イタリア様式の設計を行った。燦然たる白亜の大理石で造られた二階建ての正面、および燈明台を頂点とするふたつの美しい鐘楼を有し、リスボンにおけるもっとも壮大な教会のひとつとされる。内部には単一の身廊に広大な翼廊が配されて、深奥の主要礼拝堂がローマのイエズ会ジェズ教会を想起させ、反宗教改革の雄々しい宗教的情熱を表すため、建築的な能力のすべてが傾注されている」。祭日には高位高官、上級聖職者、外国使節が瀟洒な馬車か、奴隷の担ぐ籠に乗って礼拝に参じるのが常である。「万聖節の日」とシユラディは考証の成果に構想力を織り合せて復元する。「座席は満ち溢れた。立席は通路と横手の礼拝堂にしかなく、民衆は入口の階段や教会広場を埋め尽す。どの善男善女も一張羅を纏っている。高い祭壇にいる聖職者とその従者は厳粛な儀式に相応しく純白の式服で身を包んだ。前方の座席は貴族階級や各界の有力者のために用意され、土地の名士や貿易商が家族とともにその後に座る。商人や技師はさらに控え目である。「すべての女性がヴェールで顔を覆う。教会の背後には汚い身なりの窮民が屯していた。」堂内には香煙が満ち、高窓から光が射し込む。「いよいよ聖歌隊席で 主よ、この祭日を我らすべてが慶び・・・と入祭文を歌い始めたとき、ここでも聖歌隊が入祭唱を歌い始めた瞬間、嵐に翻弄される小舟のように、聖堂全体が揺れ動いた。ふたつの鐘楼の大きな青銅の鐘が激しく鳴り響き、纏れた組鐘は響するばかりの叫喚のなかに墜落した。燭台は倒れて消え、ステンド・グラスは微塵に碎け、聖者像は台座から転落し、聖職者も信者も錯乱に陥る。木材の落下で十数人が死亡し、円柱、柱頭、拱門などの大理石、さらには強大な石塊が崩落した。多くは野外へ逃走したが、教会に留まる人たちは動転しつつ神に赦罪を祈った。『黙示録』で警告された最後の日が迫ると感じたからである。野外で祈る人たちの周囲も濛濛たる埃塵に覆われ、闇夜のように暗い。どの家屋も瓦礫に歸し、亀裂によって道路は沈み、地滑りで路地は消えた。馬車は大破し、挽き馬は苦悶する。リスボンの住民は半狂乱となり、死せる者と瀕死の者のなかを救いもなくさまよった。」

【第五二五項】 破壊された殿閣はベンポスタ王宮、異端審問所、リスボン市参事館、さらに落成間近な観覧席である。この観覧席は徳高き君主に相應しい建造物であつて、広場を引き立てるよう陛下が設計と建造を命じられた。観覧席に釣り合つて広場には雄大な建物が連なり、麗しい礼拝堂、閣僚の豪邸、市参事館、市庁舎、聴聞室があつた。タボラ侯爵邸、アレグレット侯爵邸、ニザ侯爵邸、タンコス侯爵邸も大きな被害を受けた。ヴァル・デ・レイス伯爵の豪邸もなかば破壊された。ヴィセント伯爵、ソウレ伯爵、ミグエル伯爵、ウンハオ伯爵、ヴィラ・ノヴァ・ダ・セルヴェイラ子爵、メスキテラ子爵の豪邸も同様である。

【第五二六項】 モンテイロ邸、ポルテイロ邸、ムルカ邸、ジョゼフ・フリックス・ダ・クンカ邸、ジョゼフ・デ・メネザス邸、プリンパル・アラソス邸、ダニス・デ・アルメイダ邸、ジョゼフ・ジョワキム・デ・ミランダ・ヘンリック邸、クリストヴァオ・マヌエル・デ・ヴィルヘナ邸、そのほか沢山の豪邸が大きな被害を受けた。激流は石造の堅固な埠頭を越えて、王宮広場の河岸を襲い、ヴェドリヤ要塞のほぼ正面、税関事務所の倉庫にまで迫つた。この地が沈没すると感じて、多く人々は激流の強大な力に圧倒され、地震で碎かれた石材を集め、防壁を積み上げようと思案する。陸軍大佐のカルロス・メルデル、大尉で技術者のエウゲニオ・ドス・サントス・カルヴァロは国王の指令によつて埠頭を調査し、河底の岩石を確認して、沈没の兆候はないと明言した。

【第五二七項】 リスボン郊外では聖ジェロニモ会の有名な修道院とベレム教会、三位一体アルカンタラ解放教会がかなりの被害を受けた。ルツズ教会、キリスト騎士団修道院の一部と付設の精神病院は倒壊。テイヘラスコム天国の門修道院とその教会は全壊した。マリアーノ・デ・カルナードス教会も同じく崩壊。サン・フランシスコ・ザブレガス修道院は教会と僧坊に多くの損傷を蒙る。サント・エロイオ神父会のサン・ベント修道会はほぼ被害を免れた。

【第五二八項】 聖ベルナルド会の壮大なオデイヴェラス僧院は多大の被害を受けた。サン・アゴスチノ修道参事会員シエラス修道院はかなり損傷。カルニード聖母受胎修道院は全壊した。良き救済修道院は被害が軽く、秘蹟修道院も同様である。

【第五二九項】 破壊を免れた巨大な建物は、ベルム王宮の諸建築、ネセシダード宮殿、壮大で豪華な建築である秘蹟オラトリオ会修道院、イタリア

カプチン会およびフランス・カプチン会のそれぞれ修道院と教会、橄欖山素足アウグスチヌス会の修道院、ラヴライド侯爵の豪邸などである。

中心部に聳える豪華な殿閣はリスボンにおける施政や交易の歴史そのものであった。焼失した福利施設や国際機関についてフランサは述べている。「地中海を遮断されたあと、中世の航路を一変させる国際交易の中心となったりリスボンは、殷富な都として発展し、インドの富で潤う奢侈を享受した。」十六世紀なかばにポルトガルの人文主義者ダミアオ・デ・ゴイスは、独立記念碑の壮麗さを語りつつ、福祉施設や国際商館の見事な建築に注目を促している。「すなわち救貧院の建物（十六世紀に造られた非宗教的救護組織で、今日なお存続している）、万聖病院の建物、外国使節の滞在宿舎（ただし中世風で重苦しい建物）、大麦貯蔵所、税関事務所、インド商館、古文書館など。」

また、高地帯につらなる豪邸は地震の被害を免れたものの、大火の延焼によって多くが灰塵に帰した。「山の手にあたるバルト・アルトには、」とこの地区の景観が『都市リスボン細叙』に誌されていた。「起伏に富む坂道が多いもの、より整備された緩やかな大路もある。そこには壮麗な殿閣が連なり、リスボンの邸宅はみな麗しいとだれもが言う。これら最上級の豪邸は美しい切石、なかにはある種の大理石で造されるが、率直に話せば、漆喰で補填してある。そこには高い天井を備えたタイル張りの広大な部屋があつて、絵画や金色の浮彫で飾られている。また、石灰で造られた素朴な天井もあるが、それらは際立った白さである。普通の家屋は石材、材木、または煉瓦で造られている。また、その内部は肘の高さまで小さなタイルが張られ、これこそ上級階層に共通した装飾であり、室内をきわめて華やかにするのである。岩石の豊富な土地として王都の近郊、とりわけアルカンタラとサム・ベントに沢山の採石業者がいる。木材については国情が異なり、毫も産出されぬので、北方から輸入する樅を余儀なく用いる。」

こうした大火による財富の損失をケンドリックつぎのように総括する。「王都の物的な富をもっとも甚大に喪失させたのは火災である。さもなければ、それらの多くは地震による被害から護られたとも考えられる。教会や宮殿や豪邸に蔵される絵画、家具、絨毯、食器を火焰はいささかも容赦しなかった。大きな図書館

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.133-135.

França, *op.cit.*, p.24.

*Description de la ville de Lisbonne, op.cit.*, pp. 8-10.

と商店の巨大な倉庫も同様であつて、後者における宝石、食器、絹物の損害はまさしく莫大とされる。ノヴァ・ドス・メルカドロス街とコンフェリタリア街の貿易商数名は地震の被害を受けた敷地から勢一杯商品を運び出し、王宮広場で救援の投げ売りを始めたが、やがて火の手が広場へ拡がり、それらすべてを焼き尽した。」外国人貿易商については商品の被害総額が一千二百万ポンドと推算され、イギリス人の損失がその三分の二を占める。「ルリサル伯爵の豪邸は火災地域の北に位置したが、邸内の豊かな家財がすべて焼失した。これを調べれば、どんな資産が失われたかが判る。テイシアン、コツレジオ、ルーベンスなど二百点の絵画、一万八千冊の書籍、千点の稿本、国王直筆のシャルル五世史、ハンガリー国王マシアス・フンタデイ（一四四〇―一四九〇）が所有したあらゆる草木の天然色植物誌、膨大な家族古文書、東方と新大陸における発見や植民へと導いた地図と海図の大集成などである。王宮は現在の王宮広場では北西角にあつたが、そこでは七万冊の書籍が失われたと言われる。ブラガンサ古文書はアントニオ・マリア・コルドソ街奥のブラガンサ公爵邸で焼失し、揺籃期本を含む聖母マリア信仰書の貴重な所蔵はマルモ街とノヴァ・デ・アルマダ街の交差点、大貯蔵庫所横手の礼拝堂で破損された。また、ロシオ広場北東端のドミニカ会修道院では、入念に分類され、公共にも供される美事な図書館が焼尽した。」

#### 第四節

震災による死亡数、死者の内訳、破壊された建物、消失した財富、罹災への緊急政策、食糧確保の措置、リスボン再建の構想、災害への危機管理の先駆、王権と教権による祈禱行列、併せて『世界地震通史―リスボン大地震』第五三一項から第五五七項

リスボン大地震による被害の総計、とくに犠牲者の算定には複雑な要因が横たわる。『都市リスボン細叙』によれば、ジュアン五世の統治下、一七二五年頃には「四〇の教区、二万余棟の建物があつて、家族は約三万五千、人口は二五万」であつた。加えてこの書物にはリスボンに住む黒人について注目すべき記述が含まれる。「とりわけポルトガルでは黒人奴隷を購入できるので、大半の召使は黒



人である。一般に彼らは白人の召使よりも好まれる。なぜなら、鉱山へ売り渡される懸念により従順で忠実だからである。」白人の場合には傲慢な者や嘘つきが多い。「女性の黒人奴隷も同じように多く、家庭で仕えるだけでなく、営利的な事業をも手伝う。日々十五スーから十八スーの報酬で彼女らは市中の商店へ派遣され、稼いだ貯えで食物や衣服を買う。この場合奴隷主は彼女らに宿を提供するだけで。建物の清掃や洗淨が役目なので、さして難しい仕事ではない。勤勉に働き、儉約を続けて、彼女らは自由の代償となる金額を数年のうちに積み立てる。」多くの流れ者や脱走兵と同じく、こうした黒人奴隷の所在も不確かであったに違いない。因みにこの時代には人口六七万のロンドン、五六万のパリについてリスボンはヨーロッパ第三の大都市であった。

大地震の翌年オランダで刊行された著者不詳『リスボン歴史物語』では、いくつかの政治的問題が犠牲者の算定を困難にしたと指摘される。「第一の理由は、まだこの都市が人口を一度も正確に数えていないことである。一七四八年まで政府はこの行政部門において無為であった。」教区教会の住民台帳に政府は多く依存するが、「これには十二歳未満の子どもが男女とも含まれていない。かつまた復活祭の告解を怠る者に、この国では破門という刑罰があるため、大勢の人々がそうした義務を嫌がり、住いを替える。」そして、人口が明確にされない一層深刻な理由は、スペイン、フランス、イギリスなど列強に包囲された国際環境にあると言う。「ポルトガルは極端な過疎化の国であり、今次の新たな減少は隣国の野望を募らせるので、犠牲者の実数を隠すのが国益とされる。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五三〇項】リスボンの地における大地震が人々に与えた衝撃を判断するには、首都を覆った状況について述べる必要がある。著名な建物を列挙するのみでは、各地域の被害を理解させえないからである。市内および近郊で火災を免れた全域を再三私は視察した。それらさまざまな街路や地区で多々考察した結果、火災は王都の三分の一を焼尽し、そうした圏内の大半は狭苦しい街路に四階・五階・六階建の住居を連ね、より人口稠密な地域であったように思われる。また、地震はリスボンの建物の十分の一を倒壊させ、そ

*Description de la ville de Lisbonne, op.cit., p. 8.*

*Rélation historique du treubrement de terre survenu à Lisbonne*

*le premier novembre 1755, La Hay, 1756, pp. 189, 191-2, 194.*

の三分の二を住めなくしたが、三分の一弱はなお居住可能なのである。ただし、大きな修復を必要とする。協議を不要とする所有地はなかった。地震と火災で有名となった王都の状況についてこれが比較的正しい情報である。

【第五三一項】 リスボンの地震、火災、津波による死者の数は、正確な数値としては実際に定め難い。そこでの人口稠密な地区が大半灰塵に帰し、ほかの地区も瓦礫に埋もれ、全市が無人の荒野と化したのを地震の数日後に目撃した人は、惨憺たる光景に驚倒して、住民の大半が死亡したと語った。(ヨーロツパ全土で多くの人士がそのように書き、公にされた。)より控え目に二分の一と言う人もあり、三分の一と述べる人もある。この場合あまり考慮されていないのは、数限りないリスボンの家族が王都近郊の全地域、広範な首都圏の裁判管轄区全四十地区、さらには王国全体のあらゆる都市と街々、ほとんどの村々に避難したことである。多くの住民がリスボンからローマへ、あるいはヨーロツパ諸国のあらゆる大都市へ逃れたとも考えられる。

【第五三二項】 こうした省察や情報の欠如のため以後数ヶ月多くの執筆者が死者の数についてかなり不適切で不正確で算定を記した。この地震の被害一覧を初めて書いたジョゼフ・デ・オリヴェイラ・トロヴァオは、正確な情報というよりもむしろ詩的な表現で、七万人が死亡したと述べた(十一頁)。「哀切な劇場」と題する作品の著者は住民の三分の一が絶命したと信じる。アントニオ・デ・サクラメント神父は『激励の慰藉』のなかで一万八千人以上が死んだと語り、この見解が妥当な数値と思われる。「情報と忠実な記述」の著者はリスボン住民の十分の一が死亡したと推定する。(地震直後の執筆であるが、彼は非常に思慮深い。)また、『リスボン壊滅』の著者も死者は住民の八分の一と推算した。

【第五三三項】 各教区の司祭に確認を命令され、陛下がどのような算定を下されたか、私は知らない。しかし、膨大な数であったと推測する。この確認は地震後急遽命じられ、動揺する魂でなお集約できたものとして至当である。また、そうして得られた情報は調査の結果というよりも、むしろ対処すべき課題だからである。

【第五三四項】 この物語における論点の一つであるから、私も可能なかぎり厳密に調査したいと思う。なぜなら、地震の一週間後にはみな見方を控え目にしたし、数ヵ月後には十万人もの死者ではないと強調されたからである。そこで私は確認できる見解を得られる方法を考え始めた。街々に私が出向き、近隣から消えた住民について数ヵ月後どうなったか、まずひとりに尋ねてみる。こうした面倒な調査を始めたが、時間の不足によって続行できな

かった。その代りに私はリスボンのあらゆる街々の情報を集めた。また、別の見地から五人が死亡したとされる教区の司祭を捜した。教会から避難できなかった沈着な民衆は、死んだ人数がそれより多いと言う。住宅や街路や教会で地震と火災により歿した人々について、私はつぎのように推論する。宗教組織と聖職者団体のすべて、貴族・閣僚の多数の連合、世俗的な同業組合、さらには司法機関と行政機関において消えた人数を確認してみよう。これらすべてについて推算した結果、記帳の仕方到大差はないので、地震の当日倒壊や氾濫や火災に巻き込まれた人数は五千有余かそれよりすくないと考える。また、治療を受けた無数の負傷者のなかで、病状の悪化により十一月のうちに加えて五千人死亡したことは事実である。この問題をめぐり厳密に算定できるのは以上に尽きる。

【第五三五項】 逝去した聖職者はフランシスコ・サレジオ会修道士二一名、テルシ才会修道士二名、カルメル会修道士十五名、三位一体会神父一六名、伝道師聖ヨハネ聖堂参事会世俗会員七名、聖アウグスチヌス会修道士五名、ポルトガル・ドミニコ会修道士三名、アイルランド会修道士四名、イエズス会士三名、聖カミロ会修道士一名、オラトリオ会修道士四名、慈悲会修道士一名である。

【第五三六項】 ドミニカ会修道女は受胎告知尼僧院において十名、救世主尼僧院において十四名死亡した。フランシスコ会修道女はサンタ・アンヌニ僧院において五名、カルバリオ尼僧院において二二名、サンタ・クララ尼僧院において六三名歿した。また、聖アウグスチヌス会修道女はサンタ・モニカ尼僧院において八名死亡した。

【第五三七項】 貴族で死亡した男性はアンジェジャ侯爵の子息で総大司教教会総長のフランシスコ・デ・ノロンハ、さらにガスパール・ガルヴァオ・デ・カステロブランコ卿、マノエル・デ・ヴァイコンセロス卿、リスボン異端審問官ヴァレジャオ・マヌエル・デ・タヴォラ、アントニオ・デ・メロ・カステロ、ロック・デ・ソーサ、國務尚書フランシスコ・ルイズ・ダ・クンハ・エ・アタイデ、戦争大臣ペドロ・メロエ・アタイデだけである。なお、スペイン大使のペララーダ伯爵ベルナルド・デ・ロカベッチも駐在する公邸で逝去した。

【第五三八項】 上位貴族の女性ではマリア・ダ・グラサ・カストロ夫人、年長の令嬢とともにルリサル侯爵夫人、ゴンザロ・ザビエル・アルコバ・デ・カルネイロの配偶者アンナ・デ・モスコソ、またロレンコ・デ・アルメイダの未亡人が令嬢とともに死亡した。

【第五三九項】 博学の神父であるオラトリオ会アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレドに私は依拠している。神父は精密な調査を行って、註解を加えた。彼の簡潔な著作はこの災害に関する文献として筆頭に挙げられる。ラテン語とポルトガル語で併記され、リスボン大地震の被害を世界に伝えたのである。

死者の数に関するモレイラ・デ・メンドンサの省察は、優れて慎重かつ綿密と感ぜられるが、『啓蒙の都市ーポンバルのリスボン』の著者フランサはさまざまな資料を総括してつぎのように述べる。地震の頃「リスボンの人口は約二六万人に達していた。比較的正確なこの数値は一七五六年に刊行された著作に誌されている。王都の人口五〇万人としばしば称するが、それを疑って一七四八年イギリス人によつて精密な調査がなされ、三〇万人を超えてはいないと言ふ。この問題には 政治的な思惑が底流にあり、イギリス政府も同胞による疑義に無関心ではなかつた。」では、震災による死者の数値をどのように考えればよいか。「伝えられる死者の数値はきわめて多様である。地震の直後に書かれた文献では七万人とも八万五千人（人口の三分の一）ともされ、ある外国人は実に九万人と誌した。ローマ教皇の大使によれば、四万人に及ぶ人命が喪われた。しかし、当地のフランス人から届いた書簡では一万四千人から一万五千人と見積られている。これはアントニオ・ペレイラ神父の充実した報告やマヌエル・ポルタル神父による記載と符合する。」こう述べて著者フランカは『世界地震通史ーリスボン大地震』に示された算定を高く評価する。「モレイラ・デ・メンドンサみずからはきわめて精密な探求によつて様々な資料の記録を訂正し、地震の当日は五千人、十一月中に負傷あるいは病氣によつて同じく五千人が死亡したとの結論を得た。災厄の直後にポンバルが海外の総督に宛てた通達とこの数値は一致する。」また、フランカは死者の内訳についても上流階級の人々が比較的少数であったと判断する。「一万人の犠牲者のなかに身分の高い人は八名ほどにすぎず、リスボン駐在スペイン大使、ルリサル侯爵夫人（大火は彼女の邸宅で始まった）、ルミール侯爵夫人がふくまれる。その理由は明瞭である。高位高官は教会へ行かず、私的な礼拝堂を有し、十一時前にミサを行う慣習はなかつた。また、家族によつては冬期を田園で暮し、のちに宮廷へ戻るつもりでいた。国王一家も十月三一日の夜はベレム宮殿で過し、リベイラ王宮の火災を免れたのである。」他方民衆の多くは万



聖節の儀式に参じ、教会へ出掛けた信者は三万人以上とされる。「もつとも多数の死者が発見されたのは、」とフランカは述べる。「教会である。四十に及ぶ教区教会のうち十六は流失ないし焼失し、十九は瓦礫の山となり、残りの五つも被害を受けた。ほかに十六の教会が炎上した。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五十項】 リスボンの地震と火災によって焼尽した建物、不動産、機具、宝石、金貨と銀貨、農地は巨額に達し、その際は限り測りしれない。『地震等歴史物語』の著者は様々な算定を付記しているが、みな恣意的なものと私は判断する。そのような算定とは別に、私が行った調査では、かなりの部分がより確かと思われるので、ここに若干の原理を提示して、莫大な損失である路と推算したい。

【第五十一項】 リスボンの寺院で聖なる礼拝に捧げられる富は、いかにしても凌駕できないとすべての民族が告白する。富裕な都市の大半でのこれに劣らない。すべての教会には神への礼拝に供するため、金銀や貴重な宝石を鏤めた多数の聖杯、十字架、シャンデリア、大燭台、照明、聖器類が蔵され、豪華にも聖櫃の飾り布、祭壇の台座、説教壇の飾りに銀が施されていた。これらの装飾には錦の布地、絹織物、ビロードの刺繍、金の紐やふさ飾りが用いられる。大抵は教会の全体に豪華な造作が施されていた。多額の経費をかけて広大な本殿は、麗しい石材で建造され、あまた金の彫刻と一流の絵画に飾られていた。金と銀しか見られず、豪華な装飾を施した総大司教教会には、どれほどの富が蔵されたであろうか。国王ジョアン五世の豪華な趣味の所産すべても同様と考えられる。リスボンの大聖堂、サンタ・マリア大寺院についてもそうである。

【第五十二項】 王宮とその大宝物殿ふたつには精錬された宝玉、黄金、銀が満ち溢れていた。それらはフンソエン地方で驚くほど大量に採掘され、ほかでは僅かしか得られないものである。宮殿と宝物殿にはもつとも貴重な武器が多数保管されていたのではないか。したがって、リスボンが裕福で贅沢な都市であること、すなわち一介の土木技師ですら多くが金や銀や宝石を持ち、絹やビロードの織物、最良の材質の家具を所有することが判れば、裁判官や貴族の殿閣と邸宅で灰塵に帰した財富、すなわち宝石、貨幣、武器、

家具を逐一点検する必要はない。

【第五三項】 焼尽した首都の一部がもつとも富裕な地域であるのを重視すべきである。なぜなら、そこにはきわめて多くの教会と殿閣、さらにはそれらの君長が鎮座するだけでなく、ポルトガル商人の大半や実業家の全員が住むからである。同じく留意したいのは、この地域にふたつの目抜き通り、金座と銀座があり、四つの広い道路を毛織物や絹織物の商人が拠点とするところである。また、市中を練り歩き、極上の装飾品を売り捌く商人で殿閣の中庭は混み合っていた。リスボンの三つの中心地では小間物屋や食品問屋が軒を連ね、工芸ギルド街はもつとも豊かな階層をつねに呼び寄せた。

【第五四項】 王立税関所、インド商館、タバコ栽培園、商工会議所で焼尽した財産は、算定し難い。これらの建造物はきわめて広壮であり、人口稠密な首都に満ち溢れるあらゆる種類の財貨でつねに一杯であった。外国人が多く、多くの財貨を有し、大きな邸宅を借りていたことも、留意すべきである。

【第五五項】 かつまた火災によっていかに多くが焼失したかを省察し、リスボンの富がいかに無限であったかを考えてほしい。あまた数多のポルトガル人が歿した。王国も共同体も商業都市もこの火災によって消えた。

『啓蒙の都市ーポンバルのリスボン』でも地震、津波、火災による被害がつぎのように総括される。「六つの病院のうち火災も免れたものは皆無である。王国きつての名家三三が地震または火災によって豪邸を破壊された。」たとえば、ブラガンサ家、カダヴァル公爵家、ラフォエス公爵家、アヴェイロ公爵家、さらには蔵書でも著名なルリサル<sup>II</sup>エリセイラ家などである。「そうした邸宅は際立つ構築ではないが、きわめて高価な絵画、家具、絨毯の蒐集を大抵は蔵している。それらすべてが消失した。しかし、最大の損害は王室であつて、リベイラ王宮、総大司教教会、歌劇場が壊滅したのである。ジュアン五世とジョセフ一世の献身的な配慮によつて達成された建築と装飾の総体は、部分的に地震には耐えたが、それも大火に焼き尽された。その巨大な財富、絵画や聖器の集成、七万巻もの王室蔵書、インド倉庫に保管された宝石類もすべて消え失せた。」中心部で住宅の三分の一は地震に耐えたが、それらも火の手に包まれる。「たとえば銀座通り・銀座通りのように低地帯でも大抵の街路は通行できたが、ほどなく火焰に襲われ、狭隘な道路に密集四階建て、五階建ての木造家屋が容易に標的となつた。私たち

の調査によれば、王都に存在した二万戸の住宅のうち、大火のあと危険なく住めるのは三〇〇戸と推算される。」

在留外国人の経済的損失も甚大であった。とりわけポルトガル経済を牛耳ったイギリス資本についてペイス著『神の怒り―一七五五年リスボン大地震』は詳細である。「イギリス人貿易商の被害の全容が次第に明らかとなった。彼らの店舗のいくつかは五万ポンドから八万ポンドの商品や債務を失ったとされる。神の配慮による一撃によってどれほど家族が打ちのめされ、どれほど商売が攪乱されたことかと、ヴィルトシエアーの織物商、ジョージ・ヴァンセイは日記に誌す。」貿易商協会の理事である彼の弟も、二万三千ポンドの負債を背負って倒産した。さらにバーミンガムの有力な銃製造業者、ファーマー・ガルトン社も大きな打撃を受け、経営陣の刷新を余儀なくされる。この企業はイギリス政府に大量のマスカル銃を調達するとともに、奴隷貿易に係って西アフリカや北米で銃を売り捌いていた。リスボンに設けた支店を足がかりに投資にも手を染めており、挫折の事由のひとつは、頼みとするポルトガルの大手金融業者、サム・モンタイグートの被災と倒産である。

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五四六項】 国王陛下は熱意ある行動的な国務尚書、セバステアオ・ジヨセフ・カルバルホに補佐され、国民の救済、安定、保護とリスボンの輝かしい復興のため、緊急政策を発令された。すべてが的確な決意、賢明な措置、神聖な法令であった。

【第五四七項】 早くも十一月一日リスボン参事会議長アレグレト侯爵は、壊滅した王都を救うため周到な用意を調べ、軍隊、人材、通貨および王立貯蔵所を宰相の権限によって役立てるよう迅速に指令された。これこそ国王陛下の仁愛を示す不朽の証左であり、わが宮廷の信義と榮譽である。やがて枢密院の対策本部をリベイラ河岸と王宮広場の二カ所に設け、火災を免れた市民や水路で辿り着いた人々へ、大部隊の支援のもとに食料を分配するよう決

França, *op.cit.*, p.59.

Paice, *op.cit.*, pp.58, 126, 178-179.

David Willims, James Farmer and Samuel Galton, the reality of Gun

Making for the Board of Ordnance in the Mid-18th Century, in *Arms*

& Armour, Volume 7, No.2, 2010. pp.125, 128-129.

定された。(各地区の責任者がこれを点検することも命じられた。)また、陸路で来た人々にも混乱なく分配できるよう、対策本部が食料を王都の入口に用意することも指示された。こうした分配の実情を審査するため、審議官にはニクラウ・ルイズ・ダ・シルバとアントニオ・ロドリゲス・デ・レオンが起用された。これらの方々は多大の熱意と尽力をもつて行動され、リスボン市民救援のため食糧の確保にも奔走された。国王陛下もあらゆる王室の特権と裁可の権限を、市門へ出荷される食料品すべて、さらにはベレムのサンタレム河岸で取引される魚介類すべてに適用し、翌年一月までそうした裁量を継続するよう命じられた。震災直後の数日とくに懸念された飢餓が、この賢明な措置によって完全に防止された。

【第五四八項】 まもなくエヴォラの竜騎兵隊とペニッシュ、エルヴァス、オリヴェンサの各歩兵隊が王宮へ招集され、近衛兵隊の四分の一がベレム、カンポリド、コロヴィア、カンポ・サンタ・アンア、カルダル・ダ・グラサ、さらに(ロシオ)四辻に駐屯し、主要な街路の管理にあたった。彼らの駐屯をアテンテージョ地域の連隊が引き継ぎ、竜騎兵隊は数カ月以内に本来の部署に戻るよう定めじられた。こうした必要に応じて応急の兵舎が木材で建造された。

【第五四九項】 神を畏れず大規模で多様な掠奪が王都で頻発するとこの報告がなされたので、流れ者を取り調べるとともに、疑わしいと思われる人物、リスボン大審院長(ラフォエス)公爵の通行許可証を携えぬ人物を検束し、莫大な盗品をリスボンで差し押さえるよう、同じく国務尚書をおし司法官に命じられた。また、同公爵は閣僚の手勢となる司法官と法学士を任命され、王都十二地区の監査官のもとで両者の連携を確立するよう指示された。すべて掠奪の容疑者を簡略な調書によって起訴すること、またレドール公爵に任命された裁判官が、事実自体の確認と原告自身の陳述に基づいて判決を下し、特例として迅速に即日容赦なく処刑すよう、十一月四日の勅令で命ぜられた。この勅令によって大勢の罪人が死刑を宣告され、数カ所に設けられた絞首台で処刑された。おぞましくも彼らの遺体は数日間絞首台の脇に曝されたのである。懲役に処せられ、瓦礫の除去を命じられた罪人も多い。掠奪という人災がこれによって根絶された。

【第五五〇項】 だれもが飢渴しており、種々の食料品が高騰した。用務も急増する反面、人手が減ったため、法外な賃金も要求された。国王陛下は勅令を発せられ、すべての食料品を十月末の価格で販売すること、いかなる仕事や労務者であろうと、通例以上の賃金を与えてはならぬこと、かつまた



違反者には刑罰として瓦礫の除去を科することを命じられた。

大地震における危機管理としてポルトガル王権が発した『緊急政策』は、十四項目に及ぶが、第一項遺体の除去に続いて食糧の確保が「第二項 飢餓への恐怖の除去」と題して指令された。「死せる者の埋葬を適切に行った聖職者は、遅滞なく生ける者の救助という愛徳を実践されたい。なぜなら、多くの艱苦を潜り抜けながら、生きる気力を喪失した人々は、かかる錯乱と惨状のなかでかならず飢餓に苦しむからである。憐憫の情と済民の心をいささかも惜しむことなく、国王は賢明で迅速な王命によってこれを実施される。国外からの食料品を受領するため、また貧民が糊口を凌ぐのに市会議員の推挙を必要とせぬよう、それらの納入と分配を公正にするため、首都の要職を補佐する議員をただちに任命することを枢密院議長侯爵には指示する。／こうした目的のため法令が発せられ、震災前の価格を変えずに、日々の食糧を民衆に供する特例が定められる。なおまた、主要政策の要請に従って、王命によりすべての魚介類が免税とされるだけでなく、簡便な運搬手段と迅速な指示によって食糧を調達し、四散した民衆に便利な場を販売所としてあらゆる必需品を供するよう、各地に多数の貴族が派遣される。／しかしながら、王国の害虫、独占で利する輩をつねに充分警戒し、民衆を邪悪で横暴な商売のもとに呻吟させ、暴利で耐え難くさせるのを陛下が聞き及ばれたときは、当然の処罰として重罪を科し、見せしめの矯正を行うほかない。／飢餓を防ぐだけでなく、食糧の急騰もなく、生活がただちに正常に維持できるよう、必要と見込まれる以上を用意すべきことがさらに政策で指示される。この政策に従わず、自己の宝庫を開けて、飢えた人を救済しなければ、国王陛下の深厚なる憐憫に応えてはいない。それゆえ、陛下の慈愛と偉大な人格に相応しい雅量によって、きわめて大量の多種多様な支援物資を多くの人々へ確実に分配するよう命じられた。控えめではあっても、陛下の偉大な魂についてありのままに語らざるをえない。／王室の徳行は活きた法規として、臣民がつねに従うべきものであり、神聖な模範として直ちに見習われる。したがって、貧しからぬ人々におかれては、飢えた罹災者に邸宅と倉庫を開放し、避難所と食糧を提供されたい。また、必要とされるのが明らかな場合には、家財を与えないまでも、貸すことを留意し、実行されたい。／宗教団体の愛徳がとくに顕著であり、力能と徳操において傑出することを、彼らの榮譽として感謝しつつ記録したい。われらが確かに知りえたこ

るでは、貧民へ奉仕するため自己の衣食を節約するよう指示されたのである。そして、かくも神聖な営みとして必要な食糧を節約することに、全員が喜びを感じたと言う。ノ結論的には原始キリスト教のよき時代が今日なお根づいている。じかに神の手からかくも優しく授けられる寛厚で熱烈な愛徳はそこに発すると思われる。」

こうした緊急政策の成果についてひとりの在留イギリス人は、『ジエントルマン・マガジン』同年十二月号に無署名の証言を寄せている。「十一月四日国王は勅令を発せられ、軍人が王都のすべての街道に駐屯し、無人化した住居での掠奪を阻止するよう、また家主が自己の住居を死守するよう命じられました。外に出ると、だれもが尋問を受け、厳しく点検されます。隣国へ脱出しそうなすべての人、とりわけ労務者や技術者を引き留めるために、騎兵隊と竜騎兵が道路で見張るのです。他人の財貨を盗賊が掠めるのを押さえるや、ただちに告発し、翌日絞首刑に処します。そのため王都の繁華街にいくつか絞首台が設けられました。ついで国王は国民の救済に手立てを講じて、穀物、小麦粉、米などを大量に確保されました。これらの多くはイギリスから支援されたものであり、飢餓の怖れがかくして遠ざかるのです。すべて製粉業者が仕事の再開を指示され、新たな食肉店も認可されて、牛や羊が各地から運び込まれます。厳密な点検が済むまで、船舶は差し止めとされ、船長の断言によれば、貿易商か船主でなければ、積荷できません。以前には高く課税されていましたが、現在は鮮魚をも含め、すべての必需品が無税です。」

二〇〇九年に公刊された論集『一七五五年リスボン地震再訪』には地質学、統計学、建築学、土木工学、構造力学等の専門家八二名が寄稿しているが、ここで主要な課題のひとつは、災害における危機管理の歴史的検討である。そこに収録された論文「一七五五年リスボン地震と危機管理理念の起源」において、ポルトガルの土木工学者ベターミオ・デ・アルメイダは以下のように論じる。「ポルトガル国王は緊急の対策とリスボン再興を宰領する完全な責任と権限をポムパルに授けた。この際の指導力は有名な応答、どうすべきか に対して死せる者を埋葬し、生ける者に糧を与えよう」として象徴的に伝えられている。「こうした言葉を彼が実際に発したか否かは確かめるすべもないが、アルメイダは直ち

---

*Memoraas das Providencias que se derao no Terremoto, que padeceo*

*a Corte no anno de 1755, Lisbon, 1758. pp. 6-8.*

*Gentleman Magazine, December 1755. pp.561-562.*

に実施された緊急政策をつぎのように列挙する。第一は震災による莫大な遺体の処理である。「伝染病の蔓延を防ぐため、遺体を処理すること。それらを小舟に積み、テージュ河に沈めることが、問題を解決する最善の方策とポムパルは結論した。」その二は罹災者の救護、食糧、住居への配慮である。「生き残った人々の介護、飲食、居住。救急病院が設けられ、リスボンでの飢餓を防ぐため、特殊な方策が採択された。すなわち、国内のあらゆる地方から船舶で食品を運び入れ、同時に物価の統制を敷いたことである。」瓦礫の撤去と仮設住宅の建設もなされた。第三は治安の維持と犯罪の防止である。「軍隊を招集して公共の治安を護り、簡易裁判を設けて掠奪を断ち、家財を復元した。」人心を動揺させる迷信や流言がその四にほかならぬ。「運命論的な恐怖へ導く迷信と予言、ならびに反動的な主張に対する戦い。(たとえば一七五五年大地震の一周年に新たな地震が発生するとの風評が流れ、これを排除する必要があった。)」加えて国際的な物的支援の受け入れや輸入品の課税引き上げも挙げられる。「こうした政策の若干は」と現代の土木工学者アルメイダは評価する。「災害における危機管理および国内保護計画として構想されるものにきわめて類似している。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五五二項】 ときには住民が非常に高い家賃で住宅を借り、地主も法外な借地料を要求することを、同じく国王陛下は聞き及ばれ、震災後の賃貸契約書をすべて無効にし、裁判所の査定手続なしには土地を賃貸してはならぬ、と十二月三日の法令に定められた。なお、住居に關しても同様の措置が下され、震災以前の家賃から逸脱せず、従来 of 金額をほぼ保持すること、また違反する場合には財産を没収することが警告された。

【第五五三項】 王都の範囲をアルカンタラ、アルコ・デ・カルバルハオ、カンポリド、クルズ・ドス・カトロ・カミンホス、サンタ・アポロニアなどの市門の内部に限定しつつ、この地域では特別の認可なしに家屋を建ててはならぬと、同じく十二月三日の法令により命じられた。

【第五五三項】 まもなく最高の技術者マヌエル・デ・マイヤにリスボン全地区の設計図を作成することを命じられ、雄大な構想の公表に期待を寄せ

A. Betâmio de Almeida, *The 1755 Lisbon Earthquake and the Genesis*

of the Risk Management concept. in Luiz A. Mendes-Victor, edit.,

*The 1755 Lisbon Earthquake : revisited*, 2009. pp.153-154.

られた。かくして大きな広場や真直な道路を造るとともに、均等な高さ、六十フィート、五十フィート、三十フィートにして左右対称の調和ある建物を築き、焼尽した王都の再興のためすべてを改革する全体計画が立案される。こうした計画の公表以前に新たな住宅を建てたり、破壊された建築を再建することは、王都のふたつの法令によって禁止され、執行の妨げとなる境界画定がただちに無効とされた。

【第五四項】 大都会に居住する住む多くの多数が、数日間または数週間離散して近郊に逃れ、ついには国中をさまよったあと、王宮広場、テージユ河畔、サンタ・アンナ緑地、サンタ・クララ緑地、サンタ・バルバラの野などリスボンの主要な草地へ、さらにはあらゆる道路の余地、王都近郊の野原、修道院の裏庭へ辿りつき、そこに木材で仮小屋や仕切りを設けた。震災直後六カ月の間に九千以上の仮設小屋が構築される。その後なされた小屋の建造や改築は、礼拝用の十字架を二千個も三千個も祀るためもあり、そうした住いに要する日用品の供給と同じく、信じ難いほどの出費と遅滞できぬ多大の労力によって達成された。

【第五五項】 同じく特筆すべきは、一年余りの期間に千戸以上の住居が再建されたことである。(六千クルザードを多少超える経費であった。) また、近郊にも多数の住居が新築された。この莫大な経費に居住可能な全家屋の修復費を加えると、震災後王都の事業に要した金額は五千クルザード以上と算定される。

王都復興の計画と実現はそれ自体大きな研究課題であって、歴史家フランサは名著『啓蒙の都市ーポソバルのリスボン』の大半を壮大な事業の把握と分析に当てている。ここではそうした研究の一端を紹介するに止める。「一七五五年十二月四日ポルトガル王国首席技術官マヌエル・ダ・マイヤ中尉は、」とフランサは叙述する。「国王の従弟、大審院長ラフォエス公爵に、リスボン再建の諸問題を研究した膨大な論考の第一部を提出した。三千語以上に及ぶ文書であったが、さらにマイヤは一七五六年の二月十六日と三月三十一日に一層長いふたつの文書を提出する。」要塞の建設などによって宮廷で絶大な信頼を博する彼も、すでにこのとき八十歳であった。「まさしくマイヤの文書に盛り込まれたのは、都市計画をめぐる所論、建築様式の提案、建物の安全性と街路の衛生を重視した工学



上の詳細で斬新な提言である。理路整然とした文書であって、ポンバルのリスボンは多くの原理をここに負うとされる。「第一の文書で周到にも彼が四つの試案をしましたが、その三つは古来の王都を部分的に改造するものであった。」だが、もうひとつの解答をマイヤは考えていた。古い王都は運命に委ね、あらゆる側面において新たな王都を建設せよ、と。「もとより部分的な改造のほうは、無難な事業として幅広い賛同を得られるであろう。」だが、同時代人を大いに危惧させる構想をマイヤは正当なものと強調した。第一には古い王都の再建に伴うあらゆる問題が、そうした計画の断行によって解消する。すなわち、建物の現状を調査し、それらの存否を決定し、異議申立てを聴取し、賠償についても検討すること、これらにかならず伴うさまざまな請求に対処する必要がなくなる。つねに技術者を悩ます残骸の処理に苦勞する必要もないのである。ついでマイヤは真に幸ある土地で新たな都をする喜びを語り、その情熱を周囲に浸透させた。これによって人々は大惨事の危険から解放され、かならず一層幸福になる、と。

「リスボンの復興事業はきわめて早く着手された、」とさきに挙げた論文でアルメイダは要約する。被災地域の再建は瓦礫の粉碎と除去に始まるが、抜本的な政策と立法化がつぎのように進捗した。「一、王国の主席土木技師マヌエル・ダ・マイヤに王都再建に関する報告書を提出するよう要請された。この報告者は三つの文書から成り、各々が一七五五年十二月四日、一七五六年二月十六日、そして一七五六年三月三十一日の日付となっている。二、将来の紛糾を避けるため被災地区の道路、広場、住宅について調査と登録を行った。また、新たな住宅の建設を禁止し、再建計画に支障をきたす住宅の取り壊しを命じた。三、建築資材、建設工程、人的資源、財政支援、法的措置を総合的かつ数理的に立案し、実施の前提として物価の高騰を抑制した。四、建築家と技術者から成る研究班が復興計画を発展させ、建築構造の安全性、都市としての美観、公衆衛生を充分に考慮した。」こうしてマイヤは都市の建築に関して重要な条件を後世にも認識させた。「都市において建物の高さを制約せず、自由な再建を許すのはきわめて危険である。なぜなら、国民は一七五五年の地震の恐怖を忘れ、学術的見地からの規制と予防を考えない。建築の厳しい基準が経済的理由の優先によって等閑にされる。」「危機管理という統合的な方策を深刻な事件や惨事に適用することは、一七五五年のリスボン地震がヨーロッパ文化に惹き起した数々の変化のひとつと考えられる。この歴史遺産は当時の政治的、哲学的状況とともに地震自体の特殊な様相に由来

する。「こうしてこの土木学者はジャン・ジャック・ルソーの言葉をも引用しながら現代の私たちに警告する。「一七五〇年を経た現在、一七五五年の事実は危機管理の基本的な道標と受け止めてよい。人類への責任とともに政治的な意志と知見に基づく 理性の 時代が始まったのである。運命論的な倫理から責任という倫理へ世界が転換し始めたとき、危機管理の本質は事件に伴う最悪の事態を想定するところにある。」大惨事に対する現在の見方や対応は、十八世紀とは勿論異なる。しかし、「一七五五年という歴史的な道標を肝に銘ずることは、ポルトガルや世界における大惨事から人類を防禦するため、かならず強い激励となるはずである。」

『世界地震通史―リスボン大地震』

【第五五六項】 総大司教枢機卿猊下は十一月十一日付教書を国王陛下とおし通達され、大司教コレジオ、サンタ・マリア大寺院、聖職者団体、各修道会、リスボン市会の参加のもとに同月十六日恩寵を乞う祈祷行列をサンタ・ヨアキム礼拝堂からネセシダーデス教会へ実施すること、また今後毎年十一月の第二日曜日には聖母マリアの加護を願い、晩課の断食を捧げること、を指示された。この祈祷行列には国王陛下、王族の方々、宮廷の全員が参加され、きわめて敬虔かつ献身的に営まれた。

【第五五七項】 十二月十三日同じく総大司教枢機卿猊下の指示により聖職者団体と王都の修道士がみな素足で平伏しつつ、(サン・ロケ教会) サンタ・ヨアキム礼拝堂に集まり、神の慈悲と聖者の加護を懇願して祈祷行列を行った。ラセモニア大司教と総大司教座副司祭に先導されて、この行列では総大司教大寺院の高位聖職者三名、王族の貴人、聖堂参事会員があとに続かれ、市会議員、多くの宮廷貴族や平民も加わって、ネセシダーデス教会まで進んだ。そこではオラトリオ会の神父が、ローマ教皇大使フィツリペ・アシエオリに補佐されて、巡礼者すべての足を洗った。こうした謙抑な所作や多くの高潔な行為が周囲の人々を感涙させ、リスボン住民の模範ともなった。王都のあらゆる修道会と数多の団体も公私にわたる悔悛を示し、敬虔な祈祷行列を営んだ。多くの全般的告解やさまざまな徳高き行為もなされた。ああ、称讃すべき稀有の御業！

Almeida, *op.cit.*, pp.155, 163-164.

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.147-148.

国王が参加する祈祷行列の模様については、『都市リスボン細叙』にさきのような叙述がみられる。「祭日の祈祷行列は数年来とりわけ壮麗かつ厳肅に挙行され、思うにあらゆるキリスト教国のそれを凌駕する。行列が通過する街路には花や緑が飾られ、軍隊が配備される。」そこでは家屋の棟々に棟深紅の絨毯が敷き、大きなシャンデリアと仮祭壇を用意する。また、王宮広場とロシオ広場には凱旋門を模した拱廊と木造の巨大な円柱が建立される。「国王は宮廷の顯臣全員を従えて臨席し、あらゆる修道会の人々、キリスト騎士団等の人々、すべての位階の聖職者、総大司教とその従者がこれに先立ち、僧帽の聖堂参事会員が輝きを添える。」祈祷行列は往きに金座通りを進み、商人通りを経て還る。「行列には多くの民衆も参加するので、先発が戻ってみると、後発はまだ行進を始めないでいる。」

また、イギリスの神父ジョージ・ホワイトフィールドは、大地震の前年「大齋節の時期に異様な祈祷行列」を観察したこのときとりわけ真剣に取り組まれた理由は、「極端な旱魃、地上の一切の果実を枯渇させるほどの旱魃」が続くためであった。「大いなる審判の日に備えて、また待ち望む恵みの雨を懇願して、連日一定の期間に修道院から修道院へ祈祷行列がなされている。そのひとつを私は目の当たりにした。かなり大きな行列であって、さまざまな衣装を着たカルメル会修道士、教区の聖職者、修道会の信者から成り、ふたりずつ並んで点火した太く長い蠟燭をみな右手に持っている。」その中央へ九人ほどの肩で聖母マリアの立像が運ばれ、尊い遺物を手にした聖職者が同じく数人に支えられて天蓋の下へ入る。「そのあとには後には修道士たちと数千人の民衆がつづき、オーラ・プロ・ノビス を唱和する。」同じ頃緋色の聖衣と宝冠で飾られたイエス像が盛大に慈恵修道院から大聖堂へ移される。「翌日の夕刻私が訪れると、」とホワイトフィールドは誌す。「主キリストの像が特大の蠟燭に照らされ、広大な大聖堂の高み、祭壇近くに置かれていた。そこには多数の貴族とともにあらゆる身分や地位の人々が参じている。到るところから蝟集する彼らは、順々に境内へ入り、礼拝を行うことを門衛から許可されるのである。これらの人々は跪いて主の踵に接吻し、左目と右目で拝したのちそれに数珠を触れる。あとに控える人が数珠を受け取り、順次これが反復された。そうした光景が連続三日繰り返され、その間教会と広場には車馬と人波が溢れ、身動きもならぬほどであった。ここでは音楽がかなり控えめで、礼拝堂は眩しいほど照明されている。第三日の昼前雨が降り、運ばれた

ときよりも格段大きな喜びをもって、主の像が盛大に慈恵修道院へ戻された。

大地震直後総大司教の主宰による祈禱行列が、これらより数段厳肅で悲壮であつたことは想像に難くない。『世界地震通史―リスボン大地震』の記述と多少重なるが、これに参加したオラトリオ会アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレの証言を引用する。「この中枢機卿総大司教は良き牧者の責務を担われた。すなわち、宗教的な儀式を行うべく様々な場所に小屋を建てるよう指図され、いかなる告白をも聴聞する権限をすべての聖職者に与え、聖母マリアを讃える国家的な断食を数日間命じ、神の怒りを鎮めるため公的にも私的にも祈禱を捧げるべく配慮したのである。こうした目的のため十一月十六日日曜日に悩める聖女教会へ全市を挙げて祈禱行列が営まれ、生き残った者の生存を神に感謝した。この儀式には国王陛下もご一家全員とともに臨席される。また、毎年聖母マリアの加護祭において歳々の国家的な断食とともに毎年同じ行事を繰り返すことが、公の誓いとして定められた。さらに十二月十三日金曜日にはほぼすべての宗教品級から成り、数多の貴顕の参加を伴う聖職者集団が、セント・ヨアヒム教会へ集った。そこから前述の悩める聖女教会へかけて緩やかな行進がなされ、素足のまま大地を凝視して、神の慈悲と聖者の調停を声高に哀願し、とりわけ敬虔で感動的な光景を繰り広げた。この祈禱行列の先頭としてラセデモン大司教かつリスボン司教座司教総代理のジョゼフ・ダントス・バルボサが素足で歩まれる。このあと同じく謙抑かつ敬虔に、黒衣を纏う貴顕、各宗教品級の方々、それに司教座三位階とされる長老聖職者・高位聖職者・聖堂参事会員が続かれた。悩める聖女教会での祈禱が終ると、オラトリオ会の神父が参詣者の脚を温水で洗い、タオルで拭く。ローマ教皇大使フィリップ・アシアオフスの範に倣い、彼らはこうした行為によってキリスト教の人間愛と献身を示すのである。儀式の刷新が先頃の災厄の記憶を新たにし、頬に涙を溢れさせる。かくも敬虔で恩愛ある光景は、どれほど無情な者でも深い感動なしに眺めることはできなかった。」

一〇二二年九月一日 初出

一〇二五年一月一日 補正

Whitefield., *op.cit.*, pp.4-6.

Figueiredo, *op.cit.*, pp.19-20.



【付記】

『世界地震通史』を読解するためには、十八世紀ポルトガル語への習熟と地震学の成果への通暁はもとより、学芸百般にわたる深い素養が必要と感じられる。おそらくこうした事由もあつて英訳などヨーロッパ語系の翻訳も見当たらず、残念ながら邦訳もなされていない。すべての要件において非力な筆者が、敢えてここに試訳を披瀝し、諸賢の叱正を仰ぐ所以である。